PERSONA3―俺とシャドウと時々ナンパ、あと弓兵―

あしゅき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＰＥＲＳＯＮＡ３―俺とシャドウと時々ナンパ、あと弓兵―

【Ｎコード】
Ｎ６４１７Ｗ

【作者名】
あしゅき

【あらすじ】
三度の飯よりナンパが好きッ！！そんな主人公がペルソナの世界で頑張ります！
けれど幼馴染みは凶暴、先輩は変人、同級生は可愛らしい
・・・言わせてもらうぞ？俺はお姉さんが好きなんだァァァアアッ！！！！

『ＰＥＲＳＯＮＡ３―俺とシャドウと時々ナンパ、あと弓兵―』始まります！

※題名変えました！あと主人公は中々ナンパをしません

ナンパ初戦目　（前書き）

初めましての方は初めまして。またお前かの方はそうだよ、俺だよ！

どうも、あしゅきと申します

この度は新しく小説を書かせてもらうことになりました、３作品連続はきついけれど頑張ります！

それでは今回もキバって行くぜ！

ナンパ初戦目

いきなりで悪いけど、お前らは好きなことはあるか？

俺はある。それは至高の物であり甘美な響き・・・そう、それは

「綺麗なお姉さん、今から僕とお茶しませんか？」

ナンパだッ！！こうやって話しかければ大抵の人たちは俺の魅力の虜に・・・

「ごめんなさいね、今友達と遊んでるから。また今度ね」

・・・まぁたまにはこんなこともある。けれど決して諦めず声をかけ続ければ、いつか俺の努力は実を結ぶはず！

「そうですか。ではまた今度」キラーン

まぁ用事があるなら仕方ない。俺は綺麗なお姉さんの前から足早に去った・・・結構好みだったんだけどなぁ・・・ハッ！な、泣いてなんかない！これは汗だよ！ちくせう・・・

そう思っているとどこからともなくレンガが飛んでくる。俺はそれを華麗によk

ゴシャァッ！！

・・・けれなかった。ってか痛ぇぇぇぇぇぇ！！！くそっ！こんなことする奴は一人しかいねぇ！

「うごぉぉぉ・・・な、何しやがる！「ゆかり」！！」

俺はレンガが衝突した後頭部を押さえながら涙目で彼女「岳羽ゆかり」を睨む

「あんたナンパしてるからでしょうがッ！！今は私と買い物の途中でしょ！今は私のことだけを考えt・・・ッッッ！！！な、何言わせんのよ！／／／／／」

何か勝手に口走ってたゆかりが顔を真っ赤にして俺にレンガを投げつけてくる

ゴシャァッ！！

「り、理不尽・・・だ。ガクッ」

ハァ、何でいっつもこんな目にと思いながら俺は意識をとばした

ナンパ初戦目　（後書き）

はい、そうですね言いたいことは分かります

主人公、名前出てきてないですね

・・・じ、次回こそは出してみせる！

それではまた次回！！

ナンパ一戦目（前書き）

第一話です！

今回は原作の前日です、主人公は原作キャラとはどういう関係なのでしょうか？

それでは今回もキバって行くぜ！

ナンパ一戦目

朝、俺こと「稲垣星司」の朝は早い

なんたって、朝6時に起きるのだから。そこから着替えと用意を済ませ、弓道具を持って道場へ。そしていつもの内容を五回繰り返し、俺は家に帰宅する

家に帰った俺は用意は済ませてあるので制服に着替える、そのあと朝食を作り完食した後家から学校へ向かう

と、まぁこんなもんだ。現在の時刻は8時ちょい、周りを見渡すと沢山の登校している学生が見える。どうやら今が時間的に登校にはもってこいの時間らしい、と考えていると

「オッス、星司！おはようさん」

「よう順平。おはようさん」

後ろから帽子を被り顎にはチャームポイント（本人談）のちょび髭、この明らかに高校生には見えない奴は俺のふざけ仲間の一人「伊織順平」だ。こいつとは中学からの付き合いになる、とは言っても結構な頻度で殴り合いになるんだけどな

「やっぱさ～、俺は思うわけですよ稲垣君」

「なにがだよ」

順平がニヤニヤしながら俺と肩を組む

「どこからどう見ても、やっぱりバニスーツは至高の服装だって！」

・・・・・何だと、今、こいつはなんと言った？バニスーツだと？ふざけているのか？

「・・・聞き捨てならないな、至高の服装はバニーではない。そう！スクミズこそが至高の服装だッ！」

「・・・んだと？テメェ、なめてやがんのか？」

「スクミズの良さが分からんとは・・・順平。どうやら俺とお前は相容れないようだな」

「・・・どうやら、そうみてぇだな」

スッ

とお互いに構え、間には一触即発の空気が流れている。その時、どこからともなく声がする

『分かってない、分かってないなぁお前ら』

「そ、その声は！？」

コツン、コツン

と足音をたてながら奴は人混みから表れる。特長の無いその見た目、イケメンでもブサイクでもない何処にでもいそうな容姿を持った、奴の名は・・・

「「と、友近健二！？」」

「やれやれ・・・お前らは何も分かっちゃいない。それこそ至高の意味すらな」

と、健二は両手を広げわざとらしく首を振る

「んだと！？いいぜ！テメェらに最高なのはバニーだということを思い知らせてやるぜ！」

コイツはまだそんな戯言を言うか！？

「フンッ！スクミズこそが至高の服装だということをその魂に刻み付けてやろう！」

「この俺、友近健二が粛清しようと言うのだ！そして教えてやるよ！至高の服装は、スーツ姿ってことをなッ！」

全員が拳を握り、その標的を決め、飛び出した。次の瞬間

「「止めんかぁ！」」

ガンッ！↑石

ゴンッ！↑スパイク

ゴシャァッ！←レンガ

「「「ギャァァアアッ！！！？？」」」

し、死ぬッ！！レンガ頭にぶつけられて死ぬゥゥゥウウ！！ってか明らかに俺だけ音の質が違うゥゥゥウウ！！！！

「朝からなんて話をしてんのよ！あんたらは！」

「全くだ！」

そう言って俺達の前に現れたのは、俺達に石を投げた張本人「岳羽ゆかり」と「岩崎理緒」だった。因みに俺とゆかりも中学からの付き合いだ。こいつといると理不尽なことばっかおこる気がする

「ゆ、ゆかり・・・レンガは、レンガはやめろと言っただろうが・・・！」

「そんな悶えながら言っても全然説得力ないわよ」

誰のせいだと思ってやがる！と叫び倒したかったがまだ痛みから立ち上がれないし、なによりまたレンガを投げられたくない。今度当

たったら確実に死ぬ

と思っていると岩崎が友近に何か言っている

「ほら行くよ！さっさと立ち上がりな！」

ゲシッゲシッ！

「ちょっおまっ！怪我人に鞭打つなよ！？」

「うっさい！さっさと行くよ！」

「うわっ！やめっ！引きずるなァァァアア・・・」

友近は岩崎に引きずられてそのまま校舎に入っていった。かわいそうに・・・

「ほら！早くしないと遅刻するからさっさと立って！二年生一発目から遅刻なんて私嫌だからね！」

「へいへい。っと。んじゃまか行きますか、遅刻しないためにさ」

ゆかりに怒られた俺は仕方なく立ち上がり校舎へ歩いていった

「あっ！コラッ！置いてくな！」

それを追うようにゆかりも走ってくる。因みに、これは毎朝行われてたりする

余談だが、この時順平は当たり所が悪かったのかずっと気絶していた。結局順平は始業式に間に合わず、二年生一発目から先生に怒られていた

始業式後

「ん、ん～ッ！あー、よく寝た」

「あんたね、ちゃんと話くらい聞きなさいよ。小学生じゃないんだし」

始業式終了後、俺は体の固まっている部分をほぐしながらゆかりと一緒に教室を目指して廊下を歩いている。なんか隣でゆかりがしっこく注意してくるが気にせず行こう

「いいじゃねぇか。だってよ、あのハゲ（校長）の話長いからつい眠たくなんだよ」

「プッ。は、ハゲって、流石に失礼よ」

「笑うの我慢しながら言っても説得力ないぞ」

とゆかりと楽しく会話をしていると

「おっ！よぉー！星司！元気だったか！？」

「・・・そんな大声出さなくても聞こえてるよ「一志」」

この無駄に暑苦しくて万年ジャージ野郎は俺の一年の頃のクラスメイトであり、同じ弓道部の部員「宮本一志」だ。こいつと俺はライバル・・・らしい。らしいというのもコイツが勝手に決めたことであり、俺は一切そんなことは思ってないし認めてない。まぁいい奴なのは間違いないんだがな

「星司！今年こそはお前に勝つぞ！」

「ハイハイ、けど俺も暇じゃないからな。また今度な」

「おう！それじゃな！」

そう言って一志は廊下を走っていった・・・純粋すぎるのも考えものだな

「いつまで突っ立ってんのよ、早く行くわよ」

「了解しました。お姫さま」

「なっ！ば、バカ言うんじゃないわよ！早く行くわよ！／／／／／／」

おーおー、顔赤くしちゃって、可愛いんだから♪

「・・・何ニヤニヤしてんのよ！」

「いや、別に。それより行くんだろ？ならさっさと行こうぜ」

そう言って俺はゆかりに手を強引に取ってさっさと歩く。何故かゆかりが手を取った時「あ・・・」とか言った気がするが、気のせいだな、うん！そうに違いない！・・・何でこんなに大人しいんすかゆかりさん・・・逆に不気味だよ

結局その後教室に着いた俺はとりあえず扉の前でゆかりの手を離し教室に入った。そのあと気絶していた順平にキレられたり、ゆかりがクラスの女子に囲まれて慌ててたりしていた。それで先生が挨拶をして今日は終了、俺は皆と別れて家に帰った

あと理由は分からないが何故か手を繋いでいた時ゆかりの顔が真っ赤だったが、大丈夫だろうか？風邪でも引いたら大変だから今夜メールで送っておこう

ナンパ一戦目（後書き）

流石に全キャラは出せませんでした。次で活動部メンバーは全部出そうと思います

え？ハム子が出てきてない？主人公が出てくるのは始業式だ？

すいません、自分うっかりしていて途中で気づきました

つ、次こそは出てくるので勘弁してください！

それではまた次回！！

ナンパ二戦目（前書き）

さぁ、皆様おまちかねのハム子ですよ！

ってかタイトルにもついてるナンパ全然してないな～

・・・うん。頑張ろう

それでは今回もキバって行くぜ？

ナンパ二戦目

入学式の次の日、俺は既に教室の自分の席についていた

とは言っても、一人だけどな。順平は恐らく遅刻、健二は岩崎に連行されたし、ゆかりと一志はまだ部活だし。率直に言うと、暇である

何かいいことないかな～、最近嫌なことばっかだし。あ、けど今日はよく寝た気がする。まるで睡眠時間が延びたような・・・ありえないか

と思っていると、窓側の方から声が聞こえる

『おい、知ってるか？今日転入生が来るらしいぜ』

『ハァ？入学式の次の日に？変わった奴もいるもんだな』

『噂によると、美少女らしいぜ！』

『マジかよ！？うちのクラスだといいなー』

美少女転校生、か・・・まぁ、俺は年上にしか興味ないから関係ないけどな

「星司、おはよう」

突然の声、前を見るといつのまにかゆかりが目の前にいた。どうやら考えに耽り過ぎたらしい

「おう、おはようゆかり。聞いたか？今日転入生が来るらしいぜ、しかも美少女！」

「ええ、知ってるわよ。確かに美少女ね」

「？なんだ、まるで会ったことあるような言い種だな？」

「昨日うちの寮に来たのよ。これからは一緒に住む友達・・・手出すんじゃないわよ」

「安心しろ。俺は年上にしか興味はない、だからそのレンガを下ろせ」

いくら俺でもその大きさは死ねる。説得が通じたのか、ゆかりはレ

ンガを鞄に仕舞った。ってぇ！

「あのレンガいつも鞄に入れてたのか！？」

「あんたがいつナンパするか分からないからね。念のために入れてんのよ」

なんてこったい、これじゃあナンパが出来ないじゃないか！？・・・・俺はこれからどうすればいいんだ？

「だから、ナンパは絶っっっ対許さないからね！」

「ゆかり・・・俺に死ねと！？」

「そこまで深刻なの！？」

などとゆかりと話していると

ガラッ

「さっさと座りなさい、ＨＲ始めるわよ」

扉を開けて俺たちの担任「鳥海」先生がダルそうな声で注意する。
それを聞いて生徒達はそれぞれ自分の席につく。と同時に

バァーンッ！

「セーフ！」

と勢いよく扉を開けて、息切れをおこしながら来たのは順平だ。アイツマジで遅刻すんのかよ

「アウトよ。後で職員室に来なさい。それじゃあ出席とるわよ」

順平は暗いオーラを纏いながら自分の席に向かった。まぁ自業自得だわな

「石村・・・稲垣」

「先生！付き合ってください！」

「十年早いわ。牛居」

ちっ！相変わらずの即答かよ！と考えていると、まるで背中に氷をぶっ指したような寒気が背中に走る。ブリキのおもちゃのように振り向くと

「・・・（ニコ）」ピキピキッ！

笑顔だがまるで目が笑ってないゆかりが持っているレンガを握り潰す勢いで佇んでいた。ってかマジで輝入ってるから、もう少しで潰れるからそれ！

「矢神・・・はい。それじゃあね今日の予定を・・・っとその前に、今日から新しくこのクラスに仲間入りする子がいるわよ」

お、もしかして美少女転校生か？まさかこのクラスだったとは。先生が入ってきなさいと言うと、扉の向こうからはいと女の子の声。少しすると扉が開かれる

そこにいたのは正しく美少女。暗めの茶髪をヘアピンとゴムで纏め、まるで聖女のようにそこに佇んでいた・・・同じ美少女でもここまで違うのか。クラス中の皆が見惚れていた、勿論俺も含めてな

「「藤原　公子」です！よ、よろしくお願いします！」

ぺこりと美少女が頭を下げると

「「「「うォォォオオッ！！」」」」

クラス中の男子生徒が叫んだ、勿論俺もな

『すっげぇ！可愛いとは聞いてはいたけど、ここまでレベルが高いなんて！！』

『おい！暇そうな奴ら連れてこい！親衛隊作るぞ！』

『地球に生まれてよかったァァァアアッ！！』

『おとめ座の私はセンタリズムな運命を感じえざるおえない！！』

『ガンッダァァァアアムッ！！』

「狙い撃たれたぜェェェエエッ！！」

おい、今危ない奴が二人ほどいたぞ。ってか美少女が来るだけでここまで騒げるのはうちのクラスだけじゃないか？まぁかと言う俺も

「結婚を前提に付き合ってください！」

美少女のあまりの可愛さにプロポーズをしてしまったがな

「ごめんなさい、もう心に決めた人がいるんです」

「ちくしょォォォオオ！！」

俺、撃沈。それと同時にどこかから何か岩のような物に燗が入る音がした

『ノォォォォオオ！！』

他の男子生徒も撃沈。よく見れば、健二と順平も撃沈している。何処かで誰かがスパイクを磨く音がした

「ハイハイ、静かにしてよ。怒られるの私なんだから。それじゃあ質問がある人は手をあげなさい」

すると男子生徒全員は一瞬で手を挙げた。勿ｒ（ｒｙ

「じゃあ、石村」

『はい！心に決めた人って誰ですか！？』

その時、美少女の目が光った気がした

「よくぞ聞いてくれました！顔はもう覚えてないけど、私にとってその人は王子様だったの！」

とアニメのキラキラのエフェクトが見えそうなほど顔を輝かせて熱弁する美少女。その勢いに思わずクラス中の皆が少し引いてしまう

「カッコよくて～、強くって～、それでいて可愛らしいの！」

キャーと言いながら顔を赤らめる。女子は女子で盛り上がってるし、男子は男子で血の涙流してるし

なんだ、このカオス

「その人の名前は・・・」

お、ついに名前が出るのか！誰だ！誰だ！誰なんだ！え？何でそんなにテンションが高いのかって？ここまで来たら気にならないわけないだろ！現にゆかりだって目を輝かせてるし。そしてついに口を開く

「名前は・・・「稲垣星司」って言うの！」

ピシッ

と教室の空気が固まった、いや死んだの方が正しいかもしれない。皆混乱してるのだろう、俺もかなり混乱してる。とにかく、自分の名前を教えることにした

「あの～、俺が稲垣星司なんだけど」

「え！？ほ、本当！？」

「お、おう」

ものすごい勢いで詰めよって来るので思わず退けぞってしまう。ってか近い近い近い！！俺だって人並みの羞恥心は持ってるんだぞ！？

「やっと、やっと会えたね！私の「旦那様」！！」

ビシィッ！

バコォン！！

再び死んだ教室には岩のような物を砕いた音しか響かなかった

「え？え？えぇぇぇぇぇ！！？？」

その日、校舎には休み時間になる度に俺の悲鳴と何かが砕けたような音がしたとかしてないとか

ナンパ二戦目（後書き）

あれ？何でこうなった？ハム子をこうする予定はなかったのに・・・

まぁいっか！！気にせず行こう！

感想お待ちしております。それではまた次回！

ナンパ三戦目（前書き）

これでＳＥＥＳ高校メンバーは全員かな？

あと先に謝っておきます

すいませんでした

それでは今回もキバって行くぜ！

ナンパ三戦目

昼休み、それは皆が授業から一時的に解放され浮かれる時間・・・なのだが。俺は今屋上で魔王も泣いて逃げ出すオーラを放っているゆかりを隣に向かいに座っている藤原に腕を顔の前で組む、いわゆる「ゲンドウスタイル」で冷静に尋問をしている

「で？どどどどうしてお、おおお俺が旦那様なんだ？」

「旦那様？冷静になれてないよ？」

うるさい！仕方ないだろう！俺の隣にはあの鬼神ゆかり様がいらっしゃるんだぞ！震えと冷や汗が止まらねぇよ！

「そ、それより理由を」

「あ、はい。私、貴方に惚れたちゃったの！だから旦那様」

・・・・・・え？ということは何？俺はいつの間にかこんな可愛い子にフラグを立ててたわけ？隣のオーラが邪神にクラスアップした

「・・・・・マジで？」

「うん♪」

俺が信じられなくて聞き返すと藤原は最高の笑顔で頷く・・・と言うことは

「・・・来た」

「え？」

「我が世の春が来たァァァアアッ！！」

何故か藤原が驚いていたが今の俺が気づくわけもなかった。それほど俺は打ち震え、有頂天な状態だったのだ

やった！やったぞ！彼女は俺が好き！俺も彼女が好き！これぞ正に相　思　相　愛！悪いな野郎共、俺は一足先に彼女持ちになるぜ！隣のオーラが阿修羅にクラスアップした

「・・・やっぱり可愛い」

何か藤原が呟いていたがそんなの気にしないぜ！と浮かれていると

「聞き捨てならないな」

俺の後ろから凛とした声が聞こえる、振り向くと赤髪ロングヘヤーの美女が立っていた

この人をこの学園で知らないものはいない、何故なら皆の憧れだからだ
この人をこの学園で知らないものはいない、何故なら学年トップだからだ
この人をこの学園で知らないものはいない、何故なら生徒会長だからだ

その名前は「桐条美鶴」かの有名な桐条グループの一人娘だ

「そんなことで付き合えると思っているのか？もし付き合いたければ理由と好きになったところを話してからにするんだな」

おお、なんだかよく分かんないが桐条先輩が押しているぞ。やっぱり頭がいいんだな。いや、頭だけじゃないか。容姿端麗、頭脳明晰、運動神経もバツグン。これで憧れない奴なんかいないな

「それに・・・」

けれど、そんな完璧超人の先輩にも一つ欠点がある。それは・・・

「我が許嫁「稲垣星司」の正妻は私だ！」

非常に性格が残念である、ということだ。ってかいきなり何を言い出すんだろうこの人は

「桐条先輩！俺はまだナンパしたいから結婚はしないって言ってるじゃないですか！」

「あれ！？それが断る理由！？しょうもな！」

「フッ、安心しろ。いくら星司がナンパをしても、私はお前を私しか愛せないようにしてやる」

「あらやだ、胸がキュンとしたわ！」

まぁ何て男らしい。俺が女だったら惚れてたね、間違いなく

「な、なんという乳の大きさ・・・け、けどそれだけじゃ負けないもん！って貴方は誰！？」

「私か？私は星司の正妻だ！好きな料理から好きな色の下着まで、嫁のことで知らないことはない！」

ドドーン！

それってある意味ストーカーだと思うんだけど、ってかそんなに胸を張らなくても・・・おっと鼻から欲望が「バキャッ！」グエッ！？な、何しやがるゆかり！

「あんたが悪いんでしょ！桐条先輩の胸ばっか見て・・・バカ」

！？な、なんだこの可愛さは！？思わず顔を赤らめてしまったではないか！クッまさかゆかり如きに、不覚！

ピッシャーン！

そんな俺達を気にしてないのか、桐条先輩の言葉を聞いた藤原の背後に雷が落ちる

「なっ！？し、知らないことはない・・・だと！？」ｏｒｚ

それだけ言って、藤原は打ちひしがれた。はっきし言って、意味が分からん

「だが・・・絶望するのはまだ早いぞ」

「・・・どういう意味ですか？」

桐条先輩は打ちひしがれている藤原を励ますような声で喋りかける

「君は来たばかりだから星司を知らないのは当然だ、だからこの一年で星司のことをよく知りその時にどちらが正妻か決めよう！」

「せ、先輩・・・はい！」

・・・・なんだ？このカオス？話に一切ついていけない。しかも本人の許可なしに勝手に決めんなよ、まぁ両方とも可愛いっていうか綺麗だからいいけどさ

さて、話が纏まった所

「そろそろ飯でも食うか。ゆかり、お前の分だ」

俺はゆかりに今朝作った弁当を手渡す

「あ、ありがとう・・・（まったく、こういう所で優しいからなぁ・・・だから余計に・・・・・）」

「いつもことだ、気にすんな。さて、オーイ！荒垣先輩！一緒に食べようぜー！」

俺はゆかりに一言言った後、恐らくいるであろう人物の名前を叫んだ

「セーンーパーイー！！食べようぜー！！」

「・・・ったく。うるせぇな。叫ばなくても聞こえてるっての」

根気強く呼んでいると屋上の扉の上の屋根からいかにも不良そうな外見の”女性”が姿を現す

「お、今日は速かったですね。前は昼休み中ずっと呼ばないと来て

くれなかったのに」

思わず頬を緩ませざるおえない、そんな俺の顔を見た先輩は何故か顔を赤らめてそっぽを向いてしまった

「か、勘違いすんじゃねーぞ！！速く行かねぇと弁t・・・テメェがうっとしいからだ！」

今明らかに弁当って言おうとしたよな。つまり俺の弁当をいつも楽しみにしてくれてるってことだよな！・・・ヤバッ、スゲェ嬉しい。最初なんて声かけただけで殴られそうになったのに、今ではこんなに・・・

「な、何ニヤニヤしてやがんだ！気持ち悪いからやめろ！」

「ん？いやいや、先輩は今日もお美しいなーと」ニヤニヤ

んなっ！？とかいう訳の分からないすっとんきょうな声をだしてみるみるうちに顔を赤くしていく先輩・・・やっぱり可愛いな～この先輩

「う、うるさァァァい！このヘタレ！天然ジゴロ！女泣かせ！鈍感！／／／／／／」

「ちょっ！物を投げないでってゴハァ！」ガァン！

照れ隠しなのか俺に数々の暴言を吐いて物を投げてくる。そして俺は運悪くその内の一つを頭にぶつけ、俺は意識を失った

ナンパ三戦目（後書き）

改めて謝罪を申し上げます

荒垣先輩ファンの皆様、すいませんでしたァァァアアッ！！

あのイベントを主人公の手で回避させたかったんです！

そんな俺の一言「反省している。が、後悔はしていない！」

ああ！やめて！レンガ投げないで！

・・・あ、風香の存在忘れてた。ま、まぁ次の機会に、というわけで

それではまた次回！

ナンパ四戦目（前書き）

主人公、原作キャラと出会うの巻き

最近寝不足です、一気に二日ぐらい寝たい

それでは今回もキバって行くぜ！

ナンパ四戦目

昼休みから時間は過ぎて放課後、あのあと色んなことが起こった

桐条先輩の話を聞いてからいきなり公子が「花嫁修行をします！あなたに釣り合うような立派な女になってみせる！だから待ってね旦那様♪」

と言ってどこかへ走り去ってしまった、大丈夫なんだろうか？先輩二人は

「あ、諦める気はさらさらないからな！／／／／／／」とか

「ふむ。これは負けられないな」とか言ってたし。ゆかりに限っては

「星司と一番近くにいたのは私なんですから、絶対に譲りません！」

とか何とか言ってたな

今思えば、あいつら何の話してたんだろう？順平に聞いたら殴りかかってきたし、クラスの皆は溜め息をついてたし・・・

まぁそれはおいとくか。で、今俺が何をしているのかと言うと

「お姉さん！僕と一緒にお茶しませんか？」

そうナンパだ！ただし、今回は一味違うぜ！何故なら！声をかけている相手は学校の先輩だからだ！これなら断られる心配は皆ｍ

「ごめんね、今日友達と遊びにいくの」

・・・案外普通に断られてしまった。その後も何度か試してみたが全てに断られてしまった

「・・・この世界に、神はいない」

と軽く絶望していると、目の前の本屋の前にいる緑色の髪をした女の子が目にはいった。よく見るとうちの学校の制服を着ている、しかし俺のデフォルト装備「お姉さんセンサー」が反応しないみたいだし、どうやら同級生みたいだ

「どうしよう・・・欲しいけど、お金が・・・」

どうやら本を買うための金が足りないみたいだ・・・ハァ、今月ピンチ何だけどな。けど見過ごせないし、仕方ないか。俺は本屋に近づき、女の子に声をかけた

「ハァ・・・仕方ないよね。諦めよう「なぁ、ちょっといいか？」
え？」

いきなり声をかけられた女の子はこちらに振り向いて俺を見る。おお、結構可愛いな！しかも癒し系の小動物系とみた！いいね！最高だよ！

「あの～、あなたは？」

おっと、少し考え事をしすぎたか

「こりゃ失礼。俺は「稲垣星司」君は？」

「えっと、山岸です、「山岸風花」。それでどうしたんですか？」

と人懐っこい笑顔で俺に喋りかける風花。これだ！これだよ！俺が欲しかったのは！こういうのは学校（特にゆかり）では見れないからな、やっぱり女の子は笑顔だよな・・・しかし俺はそんな考えを顔に出さず話を続けた

「いや、特に用はないんだが。風花は本が好きなのか？」

「（な、名前呼び！？）あ、はい。趣味なんです」

おお、マジでいるんだな。読書が趣味の奴って、俺は少し読む程度だしな

「ふむ。よし、じゃあ俺が風花と出会えた記念になんか買ってやるよ！」

「ええ！？で、でもそれじゃあ稲垣君が・・・」

とか言いながら視線は本に釘付けだけどな

「いいんだよ、それにこういうのは断られる方がツラいんだよ」

俺がそう言うと「えっと、それじゃあお願いします」と遠慮がちに言いながら本を差し出した

むむ、これ上巻なのか。こういうのって大概下巻がないと分からないんだよな？そう思った俺は風花に聞いてみた

「なぁ風花。これの下巻ってもう売ってるのか？」

「う、うん。昨日発売だったはずだよ」

あ、ちょっと柔らかくなってる。ってそうじゃなかった。俺は風花に本屋の前で待っておくように言ってから店の中に入った

―古書「本の虫」―

「じいちゃん久しぶり！」

「おお、星司ちゃんいらっしゃい。今日はどうしたんだい？」

この人は「文吉」さん、俺は親しみを込めてじいちゃんと呼ばせてもらってる。俺も少しだけ本にはまってた時期があってその時によくお世話になったんだ

「あれ？ばあちゃんは？」

「ここだよ」「うわぁ！？」

と後ろから音もなく現れたのは「光子」さん、俺は親しみを込めてばあちゃんと呼ばせてもらってる。俺が通っている当初はこんなにハッスルはしてなかったんだが、最近になってこういうことをするようになった

「ば、ばあちゃん！急に出てこないでって何度も言ってるだろ！寿命が縮んじゃうよ！」

「あらあら、ごめんね星司ちゃん」

本当に反省してんのか、この人は？まぁいい、とっとと用事をすませるか

俺は目立つようにおいてあった下巻の本をとり上巻と一緒にレジに出した

「これ、お願いな」

「はいはい・・・３６００円じゃよ」

・・・は？３６００円！？そ、そんなに高いのか！？

「・・・まけてくれたりとかは」

「しないよ」

ですよね～・・・ハァ。俺は諦めて大人しく財布からお金を取り出してじいちゃんに渡した

「はい、ちょうどじゃな。また来とくれよ」

「暇だったらな。じゃあね」

そう言って俺は店を出た。そして店の前にいる風花にほら、と言って本が入ったビニール袋を渡す

「え、こ、これ下巻も一緒に入ってるよ！？こんなの受け取れないよ！」

「ああ～いいっていいって。俺がしたかっただけだから、それにこんなに可愛い子に会えたんだからな」

とウィンクをしながら言ってみる。すると風花は顔をものすごい勢いで背ける、そんなに気持ち悪かった？

「（うう～あんなの反則だよ・・・普通にしててもカッコいいのにあんなことまでするなんて、私今絶対に顔真っ赤だよ。心臓もバクバクいってるし・・・恥ずかしすぎて顔が見れない）」

頬に手を当てた状態の風花がほんの少しだけこちらを見る、俺は少しひきつった笑顔で笑いかける。すると風香は顔をものすごい勢い

d（ry

そ、そんなに気持ち悪いのか、俺のウィンク・・・いやまぁ俺もちょっとないかな～とは思ってたよ、思ってましたよド畜生！

「そ、それじゃあ、またな風香！」

そう言って俺は一目散に走り出した。後ろで何か声が聞こえるが気にしない、ついでに頬に流れる冷たい何かも気にしない

畜生！こうなったら絶対にナンパを成功させてやる！

しかしそんなに上手くいくはずもなく、結局全員に断られてしまった。う～ん、何がいけなかったんだ？自宅についた瞬間、思わずため息が出る

「「ハァ・・・ん？」」

隣でため息が聞こえる、気になって隣を見ると何故か先程別れたばかりの風花がいた

「あれ？風花？」

「い、稲垣君！？どうしてここに・・・」

いや、それは俺の台詞なんだけど・・・まぁいいか

「どうしてもこうしても、そこが俺の自宅なんだよ」

そう言って俺は目の前の自宅を指差す、すると風花は喜んだような困ったような顔をして口を開いた

「えっと、私の家はそこなの」

と俺の家の隣の家を指差す。こんなに近かったのか・・・風花みたいな可愛い子が隣にいたのを何故気づかなかった俺！？

「・・・お隣さんだったか」

「・・・みたいだね」

そう言って俺たちはお互いに苦笑気味の顔を見合せた。とそこに俺の頭にナイスアイデアが浮かんだ

「そうだ、どうせなら一緒に学校行かないか？ほら、隣同士なんだし。何より俺が遅刻するかもしれないから不安なんだよ」

「い、一緒に！？」

とひどく驚く風花、嫌だったのだろうか？

「あ、その、嫌なら別に「全然嫌じゃないよ！むしろ大歓迎！」そ、そうか」

俺が言おうとすると風花がそれをものすごい勢いで叫びながら遮る

「そ、それじゃあ明日8時にここな」

「うん！それじゃあまた明日！」

俺はああと言ってスキップをしながら家に向かう風花を見送る・・・
なんであいつあんなに上機嫌なんだ？相変わらず女心ってのは分からねぇな

俺はそう思いながら自宅に入る、明日のことを考えながら

しかし、この時の俺は知らなかった

これが、最後の日常だと言うことを

―カチ、カチ、カチ―

無慈悲にも時計の針は進む、運命の時まであと少し

ナンパ四戦目（後書き）

はい。風花にフラグを建ててみました

少々強引でしたかね？

え？タルンダ先輩？なにそれ役立つの？

次回はいよいよ影時間！とは言っても原作キャラとは別行動ですが

それではまた次回！

『ペルソナの力ってスゲー！』一万ＰＶ記念！

〈祝！一万ＰＶ越え！〉

テレッテッテー！

星司「・・・おい、駄作者。マジで言ってんのか？」

〈マジもマジ！大マジだって！さっき見たら一万ＰＶ越えてたんだ！やったね！〉

星司「・・・賄賂（わいろ）でも送ったんじゃないだろうな？」

〈贈るわけねぇだろうが！大体俺は賄賂が大嫌いなんだよ！〉

星司「・・・つーことは、マジか！？」

〈やっと信じたのかよ！？俺どんだけ信用ないんだよ！？〉

星司「そうだな、鳩山ぐらいないな」

〈欠片もねぇじゃねぇか！？〉

星司「そんなことはどうでもいいだろうが。ほら、読者の皆様に言いたいことがあるんじゃないのか？」

〈くそッ！覚えてろよ！えー、皆様たくさんのご来訪ありがとうございました、こんな駄文でもよろしければこれからもよろしくお願いします〉

星司「よし、これからは質問コーナーといこうか。とは言ってもそこの駄作者がこんな風に思ってるんじゃないかな～程度で作ってるけどな。それじゃあ第1問だ」

『何故ゆかりはレンガを持っているのですか？』

〈それは星司のナンパ防止用です。いつも鞄に入れて持ち歩いています〉

星司「あれはヤバイ、もうデッドボールとかそんな勢いじゃねぇ、もっと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ・・・」

第2問『まさか岩崎って、友近に・・・』

〈はい、お察しの通りフラグは既に建っております。まだそんな描写は書いていませんがこれからバンバン書きたいと思います〉

星司「・・・そしてボコられる、と・・・何故俺らはこんな目にばっか合うんだ」

〈鈍感なテメェらが悪い〉

第３問『何故ガッキー先輩をＴＳ化させた！！』

〈個人的に好きなキャラだったので、あとイベント回避のためです。それと・・・ボウヤだからさ〉

星司「とりあえずテメェは全国の荒ハムファンに土下座してこい」

第４問　『作者ってもしかしてガンダム好き？』

〈いや、それほどでもないですね。ネタや名台詞を知っているだけで本編は種と運命とＯＯしか見てません〉

星司「・・・因みに、好きな台詞は？」

〈ガンダァァァムッ！！と狙い撃つぜ！！が好きです。キャラ的にはロックオン兄が好きです。機体はデルタプラスが好きです〉

星司「なんでユニコーンも入ってるんだよ」

〈好きだから、あとクシャトリアも好き〉

〈とりあえずこんなところでしょうか？他にも不思議に思ったことがありましたら感想にてお待ちしております〉

星司「皆！一万ＰＶありがとう！！これからも『ＰＥＲＳＯＮＡ３―俺とシャドウと時々ナンパ、あと弓兵―』をよろしくな！！」

星司「〈それではまた次回！〉」

『ペルソナの力ってスゲー！』一万ＰＶ記念！（後書き）

やっぱり一万ＰＶ記念って何か書いた方がいいですかね？

もし書いて欲しいなら何がいいですかね？

まぁ全ては自分のヤル気次第ですね

ナンパ五戦目（前書き）

主人公影時間を体験するの巻き

なお、原作キャラが出てきません

それでは今回もキバって行くぜ！

ナンパ五戦目

「ごちそうさまでした」

さて、あのあと風花と別れた俺は風呂に入った後晩飯を作りテレビを見ながら美味しくいただいた

あん？お前飯作れるのかって？まぁ一人暮らしだしな、作れなかったら餓死する

ホント、今日は出会いが多い日だったな。朝には公子に会い旦那様宣言されるし、放課後には風花と出会って小遣いがなくなるし。ホントに退屈しない日だったな

さぁてもうすぐ十二時になるし、風花との約束のために寝るとしますか

と俺がベッドに入ろうとしたとき

カチ、カチ、カチ

カチッ

時計の針は十二時を指した、瞬間

パリーンッ！！

何かが割れる音と共に、世界が一変する

「なっ！？・・・なんだよ・・・これ？」

世界は色を変え、部屋の電化製品は全てその活動を停止し、家からは血が流れ出る

まさに、それは別世界

静岡で言う『裏世界』みたいだ

「・・・と、とにかく状況判断だ。まずは外に出てみよう」

そう思った俺は玄関に行き、扉を開けた

外出た俺の目に入ったのは、何倍にも大きくなった月、まるで俺を嘲笑うかのように浮かんでいた。そしてその周りにはいくつもの棺桶がそびえていた

「な、なんだよ・・・これ？どうなってんだよ・・・？」

驚愕、そして絶望。俺の心の中は半々であった

「一体どうなってるんだ・・・？俺の街は一体何があったんだよ！！」

がむしゃらにそう叫んだ、いや叫ばずにはいられなかった。信じられなかった、皆と一緒に過ごしていた街がこんなわけの分からない薄気味悪い世界に一変したことが

ジャリ

後ろで砂利を踏む音がする、間違いなく後ろに何かがいる。俺は恐怖で体が動かなかった。こんなわけの分からない世界だ、化け物の一匹や二匹いてもおかしくはない

心臓の脈をうつ音がやけにうるさく感じる、息が乱れ、呼吸が上手く出来ない、冷や汗が止まらない

そんな状態の俺に一歩、また一歩、何かが近づいてくる

怖い、怖い

そして、俺の真後ろで足音は止まり、何かが肩に触れる

「うわァァァアアッ！！」「うおォォォオオッ！！？？」

へ・・・？ひ、人？

「すいません、やっと落ち着きました」

「いや、気にしないでくれ。こんな状況でケロッとしてる奴が異常なんだ」

あれから少し経ち、俺は今恐らくこの世界で俺以外で動ける人と話している。名前は「斉藤武」というらしい、斉藤さんも気がつけばこの世界に来ており自分以外に動ける人がいないか探していてそこに俺がいたらしい

「いや、本当によかった。もしかしてこの世界には俺しかいないんじゃないかって不安になっていたんだ」

たははは、と笑いながら頭を掻く斉藤さん。それは同感だったので俺は口を開いた

「それは自分もです。それにしても・・・ホント薄気味悪いですね」

「ああ。けど、必ず出口はあるはずだ。とりあえず一人になるのは危ない、一緒にここら辺を探索しよう」

さすが歳上、頼りになる。俺はそれを頷き返した

もうどれほど経っただろうか？俺と斉藤さんは未だにこの世界を抜け出せずにいた。しかし、俺達は諦めてはいない、まだ助かる可能性がいくらでもあるのだから

探索をしている間、俺は斉藤さんと話をしていた。なんと斉藤さんは結婚しているらしい、それに去年に子供が出来たばかりらしく絶対に帰らなきゃと張り切っていた、俺はそれを死亡フラグですよと言って茶化していた

「しかし、いいですね妻子持ちだなんて。羨ましいです」

「ハハッ、そう言う稲垣君だってモテそうな顔つきをしてるじゃないか。彼女の一人や二人いるんじゃないのかい？」

「ハハッ、冗談キツいですよ。それに彼女にはふられちゃいましたよ」

「おや、そうだったのかい。これまた意外だね、最近じゃめったに見ない完璧超人なのに」

「完璧超人である前に男ですから、女には負けるんですよ」

「ハハハッ！それ上手い！座蒲団一枚！」

「あ、どうもー！」

と楽しく会話していると

ヤツは来た

「さて、もう少し歩こうk」グチャッ！

・・・・・・え？

俺は突然のことに頭が回らなかった、いや理解出来なかった。さっきまで楽しく笑っていた斉藤さんが

仮面をつけた黒い何かに飲み込まれたなんて

「斉・・藤・・・さん・・・・・？」

グチュル、グチュル

声をかけても、帰ってくるのは化け物が蠢(うごめ)く音だけ

ふいに、斉藤さんを飲み込んでいた化け物がこちらを見る。目もなにもないように見えるが、間違いなく狙いは俺に定まっていた

「ひっ、う・・・うあ」

いやだ、いやだ

死にたくない！死にたくない！

それでも化け物は音をたてながらこちらに近寄ってくる

「う、うわァァァアアッ！！」

俺は逃げた。逃げなければ殺される。そう俺の中の何かが叫んでいたから

ひたすらに走る、ビルをぬけ、棺桶をぬき、ただ満月の下生きるために。いつにまにか、斉藤さんのことなど頭からぬけていた。そして気づけば自宅前にいた

周りにはあの化け物はいない

やった！助かった！

そう思ったとき

グチュル、グチュル

ゾクッと背中に冷たい何かがはしる、ゆっくり、ゆっくり、その場で振り返ると

「は、はは・・・マジかよ」

グチュル、グチュル、グチュル、グチュル、グチュル、グチュル、グチュル、グチュル、グチュル、グチュル、グチュル、グチュル

振り返ると、そこには十体以上の化け物で埋め尽くされていた

「・・・・・」

絶望。俺の心の中はそれで埋め尽くされていた。ああ、俺はここで死ぬんだな

俺の頭の中で所謂走馬灯が流れる。思い出されるのは、ゆかり、順平、友近、岩崎、桐条先輩、公子、風花、そして、優しくて、暖かい笑みを浮かべた――――

――――ふざけんな、こんなところで死ねるかよ。絶対、絶対に生き延びてやる！

ふと、見た場所にちょうど殴りやすい長さの鉄パイプが立てかけていた

俺は走ってその場所に行った。パイプを持とうとしたその時、どこからともなく声が聞こえてきた

〈やめろ、勝てるわけがない〉

うるせぇ、んなことは分かってるんだよ

〈もう諦めよう〉

バカが、俺は死ぬわけにはいかねぇんだよ

〈それが絶望への第一歩かもしれないのに？〉

それでも、だ。俺は死にたくない、だからそれがどんなにカッコ悪

くても、たとえ――

「――泥水すすってでも、生き延びてやるよ！」

そう叫んで俺は鉄パイプを握る、そしてその切っ先を化け物に向ける

〈それでこそ、星司ちゃんだよ〉

そんな優しくて暖かい声が聞こえた気がした

「うおォォォオオッ！！」

俺はその手に鉄パイプを握って化け物に飛びかかった

ナンパ五戦目（後書き）

どの小説の主人公でも影時間に入っても大体ケロッとしている。そんなのおかしい、と思い作った話がこれです

星司は普通の一般人です。化け物なんて見れば怖がるに決まっています

カッコ悪い？それが普通なんです。今回はご容赦ください

次からは星司も普通にケロッとしているでしょう

それではまた次回！

ナンパ六戦目（前書き）

投稿遅れてすみませんでした！

考えてもいい文章が思い付かなく、放り出していました

これからは頑張って書いていこうと思います！

それでは今回もキバって行くぜ！

ナンパ六戦目

『星司ちゃん、星司ちゃん』

『なんですか先輩？あと、ちゃん付けはやめてください』

『もしだよ？もし私が世界のために戦ってるとしたら、どう思う？』

『スルーですか？そうなんですか？ハァ・・・そうですね、カッコいいと思います』

『カッコ、いい？』

『ええ。世界のために戦う一人の美少女！今日も皆のために戦います！いい！非常にいい！これはな〇は以上の名作になること間違いなし！』

『そう、かな・・・えへへ、ありがとね、星司ちゃん。大好きだよ』

『？どういたしまして。俺も愛してますよ、先輩』

「ん、あ」

・・・懐かしい夢を見たな・・・って、あれ？ここどこ？ハッ！？もしやこれはあの有名な台詞を言うためのふりなのか！？よーし！男星司、いきまーす！

「・・・知らない天j「あれ？旦那様？」・・・公子、俺の台詞を切らないでくれ」

「へ？」

よく分かってないのか、公子は可愛らしく首を傾げる。くぅっ！カワユスなぁ！って違う！俺は改めて周りを見渡す

白いシーツに患者用の服、そして医薬品の臭い。ってことは――

「病院、か？」

なんで俺こんな所にいるんだ？と首を傾げてみる。そしてそこで気づいた、なんで公子はここにいるんだ？

「なぁ公子、なんでお前ここに〝ッ！！」

公子に聞くために体を起こそうとすると身体中に激痛が走る。よく見ると、俺の体は包帯だらけだった

なんで俺、こんなに怪我を・・・ッ！

その時俺の頭にあの別世界の記憶が甦る。まるで俺をあざ笑うかのように不気味な笑みを浮かべている満月、いくつもそびえている棺桶、真っ黒の化け物、そして・・・

「思いッ、出した・・・！」

化け物に食われた優しかった斉藤さん、俺は見捨てたたんだ・・・！斉藤さんには家族がいたのに！俺は・・・！

と思っていると

「ん、んぅ」

ん？なんだ、この右腕の柔らかい感触は？まるで女性特有の物で男の夢が詰まってる・・・

「ってダニィ！？」

腕に触れている何かに気づいた俺は光速をも越える勢いで振り向く。そこにいたのは———

「ゆ、ゆかり？なな、なんで・・・！？」

なんと、ゆかりであった。ゆかりは俺の右腕を抱き枕のように抱き締めて寝ている、勿論抱き締めているためゆかりの豊かな胸が俺の右腕に押し付けられているわけで・・・なんと言うか———

「最高だッ！！！！！」

「ダンナサマ？」

俺が叫んだ瞬間、公子の目のハイライトは消え、声は氷河期じゃないのか？ってぐらいに冷めきっていた

「すいませんでしたァァァアアッ！！」

俺は反射的に土下座は出来ないので全力で頭を下げた、とそこでゆかりは目を覚ます

「んぅ？ふぁ～、あ、そっか。私ここで・・・っ！」

ボフンッ！！

あれ？ゆかりの顔がいきなり爆発したぞ、ってか湯気出てるし

「ああ～、恥ずかし」

「何が？」

「それは・・・って星司！？」

「おいっす、やっと気づいtゴバァッ！！」ゴシャァッ！！

ようやく俺に気づいたゆかりがいきなりレンガをぶつけてきた。その前に病院にレンガ持ってくんなッ！！ってか痛すぎて死ねるゥゥゥウウ！！

「な、何しやが！・・・る」

あまりの理不尽さに文句を言ってやろうとゆかりを見ると、ゆかりは怒った顔でボロボロと大粒の涙をこぼしていた

「ちょっ！？何泣いてんだよ！？」

「うるさい！あんた何日間寝込んでたと思ってんの！？十日よ！十日間の間、まるで死んでるんじゃないかってぐらいずっと寝てたのよ！？」

とゆかりは涙を流しながら叫んだ、この様子を見る限り俺のことをかなり心配していたようだ。まぁそうだよな、昨日は元気だった友人が次の日にボロボロで病院に運ばれたなんて。それで十日間も寝込んでたら俺だってキレる

「もしかしたら！星司が二度と起きないんじゃなかって・・・！そう思うだけで私は震えが止まらなかったのに！それなのにあんたは気軽におっす！？ふざけてんじゃないわよ！！」

「あの～、私出ていった方がいいかな？」

震えが止まらなかったって大袈裟だな、けど俺もゆかりがそうなったらそうなるな

「無視？無視なの？」

・・・何やってるんだろ、俺？ゆかりはあんなに心配してくれてたのに、そんなことも知らないで俺だけ気軽におっす、そりゃ確かに怒るわな

「・・・おとなしく出ていきます」

ガラガラ、ピシャリ

・・・仕切り直して

「・・・ごめんな。俺バカだから、全然そんなこと考えてなかった。

他の皆は？」

「・・・皆心配してたわよ、桐条先輩はいつも通りだったけどどこか辛そうだったし、荒垣先輩は学校に来なかったし、クラスの皆なんて誰一人笑わなかったのよ？」

「・・・そう、か。色んな人に迷惑かけたな、俺」

そこで会話は途切れる、そのあとに待っているのは痛い沈黙だけ

そんな沈黙の中、ゆかりが口を開く

「ねぇ星司、なんでそんな大ケガしたの？事故じゃなさそうだし・・・」

お前は時々鋭くなるよな、ゆかり。ここは真実を話した方がいいのだろう、だがあんな夢物語信じてもらえる方がおかしい。ここは誤魔化しとくか

「いや～、少しドジッっちまって「嘘、だったらなんでそんな顔してるの？凄く、辛そうよ？」ッ！？」

そうゆかりに言われた瞬間、思わず目を見開く。そして頭の中で斉藤さんが喰われる場面が甦る

「ッ！」

その時、俺の体は無意識に震え出す。あのときの恐怖がまだ体に染み付いてとれないからだ。そんな俺を見てゆかりは慌て出す

「あっ！？その、えーと。む、無理しなくていいから！嫌なら聞かないし・・・！」

恐怖で震えている俺が喋れる訳もなく、その言葉に頷くことしか出来なかった

「そ、それじゃあ私帰るね？また明日来るかｒ「ガシッ！」へ？せ、星司！？いきなり抱きつくなんて、その、私にも心の準備ってものが」

「・・・悪い、少しこうさせてくれ。頼む・・・・」

「・・・うん」

それから俺は恐怖を紛らわすためにしばらくゆかりに抱きついていた。ゆかりもそれを無理矢理引き剥がすような真似はせず、ただ俺の頭を撫でていた

――数時間後――

「すまん、助かった」

あれから数時間、今思えばかなり恥ずかしいことをしてたもんだ。あー恥ずかしい

「べ、別にいいわよ。・・・私も役得だったし（ボソッ）」

ん？ゆかりが最後の方に何か言ってるような気がしたが・・・気のせいか？

「まぁいいや。それで俺はいつ退院出来るって？」

早く皆に会って謝りたいしな。しかし、帰ってきた言葉は信じられないものだった

「え～と、確か、一ヶ月だったかな？」

・・・Ｗｈａｔ？一ヶ月？・・・・一ヶ月ゥゥゥウウ！？

その日、病院には全てに絶望したような青年の声が響き渡った

余談だが、ゆかりが顔を真っ赤にした理由が俺が起きる前に口づけをしてしまったからだとは、今の俺が知るよしもなかった

ナンパ六戦目（後書き）

――これが若さか・・・・・死ね！リア充がッ！

次回は一気に退院まで飛びます。ご感想、ご質問お待ちしております

それではまた次回！

ナンパ七戦目（前書き）

まだ少しスランプです。早く脱出しなければ・・・！

あと多分、今回は過去最長です

説明の部分は読むのが面倒だなと思ったなら、後書きに括弧の単語を簡単に説明していています

それでは今回もキバって行くぜ！

ナンパ七戦目

俺が入院してから一ヶ月と少しがたった

まぁ一ヶ月の間に色んなことがあった

まず、見舞いに来た2ーFの皆に怒られたり泣かれたりしたが最後には皆で爆笑していた。荒垣先輩には殴られたし桐条先輩には抱きつかれた、しかし二人共謝ったらすぐに許してくれた・・・その後一部始終を見ていたゆかりからキツいレンガの一撃が送られたが。何うよりも風花が一番怖かった、思い出しただけでも・・・（ガタガタガタ・・・！）

そ、それはおいといて！次にあまりにも病院のナースのレベルがヤヴァかったので当然の如くナンパをした俺だが、実は家族持ちだったり、タイプじゃないとか年下に興味はないとか言われて玉砕したり、いけそうな時に限ってゆかり達が背後にいたりと散々な結果だった

で、そんなこんなで向かえた退院の日、俺は入り口前にいた。おれはたった今退院したのだ

――――――――こんな夜更けに、な

現在の時刻は２３時１４分・・・ギリギリ終点には間に合いそうだな

そう思った俺は小走りで駅に向かった

あ、そうそう。あの別世界のことについてだが、どうやら毎日０時になると同時に変わるらしい。しかもその間は電子機器は全て動かなくなる。つまり携帯もパソコンも全部使えなくなってしまうのだ

俺は入院中毎日のように体験していたせいか慣れてしまい、今では化け物を見てもケロッと出来るようになった

あと、一回病院で襲われてとっさに偶然そこにあった果物ナイフで普通に倒せてしまった。しばらく呆然としていたがそのあとバスケットに入っていたリンゴを握ると、握りつぶせた。これもまたしばらく呆然としていたが

結果として分かったことはどうやら身体能力と反射神経が異常に上がってるみたいだ・・・皮肉だな、化け物を消してる俺が一番の化け物なんて、な

それと、化け物を倒すと青いタロットカードのような物が出てくる。それに触れると武器になったり金になったり、あとなんか強くなった気もしたな

と。考え事をしてる間に着いたみたいだな。俺は駅のホームで切符を買い、電車に乗り込んだ

電車の中にはちらほらと人がいる、俺は空いてる席に座った

・・・単調な音が電車内に響く。なんだか眠たくなってきた・・・俺は襲いかかる睡魔に勝てず、意識を手放した

ガゴォンッ！！

「どわァァァアアッ！？」

グギリッ！！

「ぎゃァァァアアッ！！」

な、なんだ！？電車がいきなり止まったぞ！？そして俺の首に信じられない程の激痛がァァァアアッ！！

・・・ふぅ。ようやく痛みが引いてきた。俺は状況を把握するために周りを見渡した

佇む棺桶、にじみ出る血溜まり、そして不気味な満月。間違いなく別世界だな

そうか、別世界になると電子機器が止まるんだっけ。だから電車が止まったのか、納得

とそこに黒い粒子が形作り、王冠のような物を被った化け物が出てくる

「おいおい・・・いきなりかよ」

こんな時に持っててよかった果物ナイフ。俺は左手にナイフを構え姿勢を低くする、それと同時に襲ってくる化け物

飛びかかりからの考えなしの突進、俺はそれを難なく避け、隙だらけの化け物を

斬ッ！

と切り裂く、二つに別れた化け物は黒い粒子を出しながら溶けていった

「ふぅ・・・まぁこんなもんだろ、ッ！！」

ゾクリ、と背中に何かが走る。急いでその場から飛び退く、すると元いた場所に炎が上がる。振り返ると天秤のような仮面をつけた化け物がいた

「連続かよ、勘弁してくれ・・・」

けど、やらなきゃ殺られるからな。俺はナイフを逆手に持ちかえ化け物まで突っ走る、それと同時に化け物から何かよく分からない力が湧き出るのが見える

〈――、――――！〉

もしかしてさっきの炎を出すつもりか！？

「丸焼きにされんのはごめんだぜ！！」

と俺は手に持っているナイフを化け物の仮面に向かって投げつける

ドスッ！

とナイフは化け物の仮面に吸い込まれるかのように当たり、ヒビをいれながら突き刺さる、その時化け物の集まっていた力が霧散する

俺はその隙に一気に近づき右足を振りかぶり思いっきり化け物を蹴りあげる

「吹っ飛べェッ！！」

ドガァッ！！

俺の渾身の蹴りをくらった化け物は宙に浮き仮面が砕ける、そしてそのまま化け物はその姿を消した

「ハァ・・・ハァ・・・ふぅ、なんとかなったか」

俺は息を整えながらもう敵がいないか確認するために回りを見渡す。そのあと、足元を見るとカードのような物が二枚落ちていた

「タロットカードの、剣の絵か・・・」

とカードを眺めていると突然カードが無数に砕け散る。そのまま砕け散った無数の青い破片は形作り、二振りの剣になり手の中に収まる

「うし、武器ゲット」

これでしばらくはいけるなと思いつつ軽く素振りをしてみる

・・・うし、いい感じ！

と、その時

ガコンッ！

「うおっ！う、動き出した？」

どうしてだよ？別世界の間は電子機器は動かないんじゃなかったのかよ？

俺は突然の出来事に慌てるが出来るだけ冷静に思考する

もしかして、あの化け物か！？しかも確かこの路線にはまだ列車が残ってた筈だぞ！？

「くそッ！このままじゃ列車と一緒にスクラップじゃねぇか！？」

もし化け物がこの列車を動かしてるならいるのは一両目、ここは確か三両目だったはず。今から急いで一両目に行って化け物を倒せば、あるいは・・・

「・・・考えても仕方ないか、今は行動あるのみだな」

そう言って俺は走って一両目へ向かう。しかし、それを突然現れた化け物が立ち塞がる

〈〈〈――、――――！〉〉〉

「チッ！悪いが、こっちは急いでるんだ！邪魔するってんなら――」

斬ッ！！

〈〈ッ！？〉〉

「――――ぶった斬る！！」

そう言って俺は化け物へ武器を構え走った、ここで、死ぬわけにはいかないからな！！

Ｎｏｓｉｄｅ

さて、時は遡り星司が目を覚ました頃。空は緑に変色し、月は満ちて不気味な笑みを浮かべている、地には至るところに棺桶がただ佇んでいる。それはいつもの平穏な世界とは真逆な風景だった、人はこれを見れば「別世界」と嘆くであろう

これらは全て「影時間」のせいである。そして「影時間」には化け物が存在する。仮面をつけた化け物、それが「シャドウ」である。奴らは人を襲い、襲われた者を「影人間」にしてしまう

しかし、「影時間」はシャドウとシャドウに狙われた者しか動くことが出来ない。いや、「認識することが出来ない」ただの「一般人」では存在する事も出来ない。そのため狙われた者はなす術も無く「影人間」になってしまう

しかし、物事には「例外」と呼ばれる物が必ず存在する

それが彼ら「特別課外活動部」通称〈Ｓ・Ｅ・Ｅ・Ｓ〉

彼らは近辺起こっている「無気力症」の原因、「シャドウ」と日夜戦っているのだ

しかし彼らも普通の「一般人」、「シャドウ」と戦えるわけがない。
だが、彼らには不思議な力が存在する

それは心の仮面、困難に立ち向かうための力「ペルソナ」それを駆使し、今日も彼らは戦う

とある駅前に三人の男女が集まっていた

突然だが、ここで〈S・E・E・S〉メンバーを紹介しよう

「ハァ・・・先輩、遅いね」

そうため息をつきながら呟いたのは「岳羽ゆかり」茶髪のショートに弓を背負っている美少女である

「先輩も色々準備があるんじゃねぇの？ま、俺はこのままでもいいけど♪」

陽気な声で言ったのは「伊織順平」、NOイケメン、以上

「なんだよそれ！？何で俺だけこんなんなんだよ！」

仕様です

「殴りたい・・・出来るなら今すぐコイツを殴りたい！」

「・・・何一人で叫んでんの？頭大丈夫？」

「ひどッ！ゆかりッチひどッ！」

「――ってゆうかさぁ、何で私ここにいるわけ？早く帰って退院する星司君を待ってないといけないんだけど」

そう心底うっとしそうに呟いたのは「藤原公子」赤みかがった茶髪にその手には薙刀を持っている、その容姿はまさに美少女というのが相応しいであろう。星司と話していた時の柔らかい雰囲気はなく、まるで刃のように冷たくそして鋭いオーラを纏っていた

「何でって、あんたねぇ・・・」

とゆかりが呆れていると、三人の前でバイクが止まる

「すまない、待たせたな」

そう言ってバイクから降りたのは「桐条美鶴」燃え上がるような赤い長髪、美少女というよりも美女というのが似合うだろう。彼女は〈S・E・E・S〉メンバーの中で一番の古株でもある

「ホントよ、もう少し早くしてくれないと困るわ」

「ちょ！？公子ッチ！？」

「いや、本当にすまない。少し許嫁の写真を整理していてな」

「あれ！？準備だと思っていたのに結構どうでもいい！？」

「ああ、そうだったの。それは仕方ないわね」

「え？いいの？そんなくだらない理由で許しちゃっていいの！？」

「順平、付き合うだけ無駄よ。疲れるだけだから」

・・・なんともしまらないメンバーである

気を取り直して

「それじゃあ、サポートお願いします」

「ああ。任せてくれ」

ゆかりの言葉に大きく頷く美鶴。流石生徒会長というべきか、その言葉はとても頼もしく聞こえた

「うっし！それじゃあ行こうぜ！」

「うっさいわよ、静かにしなさいこのゲス」

残された二人は気合い充分に先へ先へと進む。その場にゆかりを置いて

その後追い付いたゆかりに説教されたのは言うまでもない

―――ついに愚者達の道は交わり会う

―――共闘の時は―――近い

ナンパ七戦目（後書き）

括弧の説明

「影時間」
――ザ・ワールドみたいな感じ

「シャドウ」
――仮面をつけたオシャレな化け物

「影人間」
――植物人間

「認識することが出来ない」
――つまり花京院状態、死んでも気がつかない「メメタァッ！」

「一般人」
――つまり君らは異常です

「例外」
――太っているのにベジタリアン、そんな感じ

「特別課外活動部」
――一応クラブらしい、シャドウと戦うために建てたクラブ

〈S・E・E・S〉
――おいどんは英語が分からないでごわす

「無気力症」

――植物人間になってしまう、オーソレミーオな病気

「ペルソナ」
――スタンド

「岳羽ゆかり」
――怪人レンガ女（ただし美少女）

「伊織順平」
――ドスケベ、バニースーツが好きらしい

「藤原公子」
――星司限定の猫かぶり、ドＳ

「桐条美鶴」
――星司大好きっ娘、最近は星司の写真を集めるのがマイブームらしい

以上です。それではまた次回！

ナンパ八戦目（前書き）

何故だろう、ペルソナだけガンガン書ける

バカテスは全然思いつかないのに・・・

今回は前回より短いです

それでは今回もキバって行くぜ！

ナンパ八戦目

Ｎｏｓｉｄｅ

「これで・・・終わりッ！」

斬ッ！！

止めの一撃をくらった化け物（シャドウ）はその身を黒い粒子に変え、消える

「ふぅ、やっと終わったか」

と星司はうんざりしながら呟く、それもそうだろう、最初は三体だったはずのシャドウが気づけば七体にまで増えていたのだから

「っと。勝利の余韻に浸っている暇はないな」

自分の手にある二つの剣を見ていた星司はハッとして呟いた

「早いとこ列車を止めねぇと」

そう言って星司は「無傷」で扉へひた走る。ただ自分の命のために

その場には、車輪とライオンが合わさったようなシャドウと馬のような物に乗った手が多数あるシャドウの亡骸だけが残り、数秒後その姿を消した

「それにしても、さっきの奴あんま強くなかったな」

星司は扉の前でそう呟いた。さぁ開けようと星司が手を伸ばすと、途中で止める。それには理由がある

それは威圧感、扉の向こうから今までの敵とは段違いのプレッシャーを感じるのだ

「けど・・・こんなんで、止まってられないよな」

星司は震えだす手を伸ばして扉に触れる、すると扉は勝手に開く。その先には

〈■■■■■――――――!!〉

自分と倍は軽くある女のようなシャドウ「プリーステス」がいた。
星司は一般人だ。けれど、そんな星司にも一つだけ分かることがあった

「は、はは・・・勝てる気がしねぇ・・・」

そう、自分の敗北だけははっきりと理解できた

「けど・・・上等じゃねぇか」

けれど星司は止まらない。帰りを待っている友達のため、そして彼女との約束を守るために

「かかって来いよ!!ビッチ!!」

星司は負けるわけにはいかない

その言葉を皮切りに戦闘は開始された

―召喚―

先手はプリーステスだった。プリーステスが何かを呼び出す仕草をすると、両脇から黒い粒子が集まり王冠を被ったシャドウ「囁くティアラ」が現れる

次は星司、星司は両手の剣をより強く握りしめ走り出した

最初は右の囁くティアラに向かい走った

―アギ―

しかしそれを左の囁くティアラが呪文唱え星司を足止めする

「くそッ！熱いんだよ！！」

しかし星司はそれを紙一重で避け、文句を言いながらも囁くティアラに剣を振るう

まずは右からの袈裟斬り、続いて右からの切り上げ更に左からの突きを放った

―ＣＲＩＴＩＣＡＬ！―

二度切り裂かれ最後には串刺しになった囁くティアラはその姿を消した

―１ＭＯＲＥ！―

「まずは一匹！！」

続いて星司は左の囁くティアラに向かって走る

―ブフ―

しかし、それをプリーステスが許すはずがなかった

「ゴハァッ！！」

突如下からの一撃に気づくことが出来ず、星司は地面に叩きつけられる

―アギ―

更に囁くティアラからの追撃

「アガァッ！！」

小規模とは言え、爆発をその身に受けた星司は壁に叩きつけられ、立ち上がることが出来ない

―ＣＲＩＴＩＣＡＬ！―

―１ＭＯＲＥ！―

立ち上がることが出来ない星司を確認した二匹は止めを差すために呪文を唱える

「さ、せるか、よ！」

と星司は剣をプリーステスに投げつける

ドスッ！

星司の投げた剣は見事に当たり、プリーステスの足に刺さる

〈■■■■■――――！〉

刺された激痛にプリーステスは叫びを上げる、そのせいで呪文は止まる

―アギ―

しかし囁くティアラは呪文を唱え発動させる

「うおッ！！」

それを星司は転がることで避ける

「くそッ！！」

と星司が立ち上がろうとすると

ガクッ

「あ、れ？」

突如脚に力が入らなくなる。足だけではなく、体全体力が抜ける

その隙を囁くティアラは見逃すはずがなく、的確に星司へ突進する

ゴッ！！

「ガッ！！」

体に力が入らない星司が避けられるはずもなく、囁くティアラの攻撃を受ける

さらに、プリーステスがさっきのお返しと言わんばかりにその髪で追撃をする

「ガァッ！！」

やはり星司はそれすらも避けられず床に叩きつけられる

―ＣＲＩＴＩＣＡＬ！―

―１ＭＯＲＥ！―

その隙を見逃さず二匹は再び呪文を唱える

「（動け！！動けよ！！こんなところで死ぬほど俺は弱くねぇ筈だろ！？）」

しかし、二度の攻撃を受けた星司の体はピクリとも動かない

「（ち、チクショォォォオオッ！！）」

そして、無慈悲にも星司の前で呪文は発動される

―アギ―

―ブフ―

炎と氷の呪文が放たれ、標的に当たった瞬間爆発した

星司の前で

「へ？」

「来て！イオ！！」

ガゥン！！

パキィン！！

少女がそう叫び銃を額に突きつけ発砲すると、ガラスが割れるような音と共に背後から牛のような椅子に座った女性が現れる

―ガル―

すると漸く煙が晴れ視界が開いた二匹の内の一匹、囁くティアラに突如下から疾風が襲う

先程の攻撃に加え、いきなりの攻撃を受けた囁くティアラは体力がもつ訳がなくその姿を消した

「星司！！大丈夫！？」

そう言って少女は星司に駆け寄る。しかし、星司の心は驚愕で埋め尽くされていた

茶髪にピンクの長袖、それは星司とは長い付き合いであり親友でもある「岳羽ゆかり」であった

「何でお前が・・・」

「それはこっちの台詞だけど、話は後で。星司はここで大人しくしてて」

それだけ言ってゆかりは走り去った

「どうだった？」

戻って来たゆかりに近寄って来た公子が質問する

「かなりボロボロ。多分回復しないと動けないと思う」

ゆかりは怒気を込め視線をプリーステスに向けながら公子に言った

「そう、それじゃあ。痛い目見てもらうしかないわね」

同じく公子も怒気を込めながら視線をプリーステスに向けた

「ああ。ダチを傷づけたんだ。許せるわけねぇよな」

手にある大剣を握りしめながら犬歯を剥き出して順平は言った

「それじゃあ行きましょうか。そして、アイツに教えてあげましょう？」

「テメェが誰に手を出したのかをなァ！」

女教皇と愚者。今ここにぶつかる

ナンパ八戦目（後書き）

S・E・E・Sメンバー、見参！

さぁここからフルボッコですよ

それではまた次回！

ナンパ九戦目（前書き）

何だか、サラサラと書ける。ペルソナ限定で早く秀吉が書けるようになりたい・・・

それでは今回もキバって行くぜ！

ナンパ九戦目

Ｎｏｓｉｄｅ

「スゲェ・・・」

星司は目の前の光景にそう呟いた

プリーステスが氷を出せば、順平が炎を出し打ち消す

髪を伸ばせば、公子が全て切り裂く

例えダメージを与えたとしても、ゆかりが傷を癒す

みるみる内にプリーステスは弱っていく、そしてついにプリーステスが地に伏せる

―ＤＯＷＮ！―

「来た！総攻撃チャンス！」

「今だ！やっちまおうぜッ！！」

「よし！行くよ！準備はいい？」

「「「これで！終わりだァァァアアッ！！」」」

―アギ―

―ブフ―

―ガル―

ドカ！！バキ！！ボコ！！

その光景、まさにフルボッコ・・・少しプリーステスが不憫になった星司であった

ドコォン！！

「■■■■■――――！！！！」

ドシャア！！

そしてプリーステスは断末魔を上げ、後ろ向きに倒れた後黒い粒子に包まれた

「スゲェ・・・勝っちまった」

はっきし言って信じられないが、目の前で見てしまったには信じなければならない。正直、複雑な星司であった

「星司君！！」

戦い終わったばかりだというのに、公子はすぐさま星司の元へ走っていった

「「速ッ！？」」

それもウサインボルトも真っ青な速度で

「大丈夫？痛くない！？」

「あだだだッ！？お前が触るのが一番痛いわ！！」

ペタペタと体を触る公子、しかしそれは星司に激痛を味あわせるだけだった

そのあと、なんとか公子を止めた星司は順平に肩を借りながらゆかり達と話していた

「で？さっきの奴は何なんだ？なんかス〇ンドみたいの出てたし」

実は化け物とか別世界のこととかどうでもいいからまず、最初に絶対これを聞こうと星司は思っていたのだ

「ああ～、何て言うか、その～」

しかし、何故かどもるゆかり。そんなゆかりの様子に首を傾げながら星司は言った

「何だよ？はっきり言えよ。お前らしくない」

それでもどもっているゆかりに呆れたのか、公子が前に出る

「ハァ、私が代わりに説明するよ。さっきのは――――」

と公子が説明しようとした、その時

「■――■■――――！！」

しぶとく生きてたプリーステスが最後に残った髪を伸ばし公子を襲う

それに気づいたのは星司だった

「ッ！公子！！伏せろ！！」

「え？」

星司の叫びで公子は振り向く、目の前にはプリーステスの髪が迫っていた

「ッ！！」

「公子ォォォオオッ！！」

ついに当たろうとした次の瞬間！

カッ！

白が世界を塗りつぶした

星司ｓｉｄｅ

あれ？ここはどこだ？真っ白だ、上下も、左右も。

確か、俺列車にいて・・・そうだ！公子、公子はどうなったんだ！？

と焦っていると

『――我は汝』

ッ！？どこからか声がする。すると上からタロットカードが降りてくる

『――汝は我』

お前が、喋ってる、のか？

『――我、汝の象徴であり、道標なり』

象徴？道標？どういうことだよ？

『――汝が望めば、敵は切り裂かれ。汝が望めば、敵は撃ち貫かれる』

・・・お前さっきからなんの話してんだよ？それより教えろ、ここはどこだ？どうして俺はここにいる

『――我は彼の者の半身なり』

あ、無視ですか。そうなんですか？

『――今こそ、双眼を見開きて、掴みとれ！』

・・・会話が全然噛み合ってないんだけど。俺か？俺が悪いのか？

ハァ、もういい。だが一つだけ聞かせろ。お前を掴めば、俺は皆を守れるか

『――汝が望めば』

おお、会話出来んのかよ。まぁいい。なら、掴んでやるよ

そして俺は今度こそ、大切な人を守ってみせる！それが、俺の覚悟だ！

『――ここに契約は交わされた』

俺は目の前のタロットカードに手を伸ばし、握り潰した

Ｎｏｓｉｄｅ

そして時は動きだす

ガキィッ！

「へ？」

公子は目の前の光景が信じられなかった、さっきまで傷を負わされボロボロだった彼が剣一つでプリーステスの髪を止めていた

「ゆかり、弓、借りてるぞ」

「は？ああ！いつの間に！？」

自分の背にかけてあった弓がいつの間にか星司の手に握られている。もはやわけが分からない。順平に至っては考えるのを止めている

プリーステスは一度髪を引き、より一層力を込める。もはや命は永くないが、せめてコイツらだけは！

プリーステスは限界まで力を込め、そして放つ

星司は矢も持たずに弓を構える

そして手を上へ突きだすように伸ばし、呟いた

「――――ペルソナ」

シャキン！

星司の手が輝いたと思えば、その手には金色に装飾された矢が一本握られていた

迫り来る一撃、しかし星司焦らず、まるで気にしないかのようにゆっくりと矢をつがえる

キリキリと糸が伸び

弓がしなる

目前に迫った一撃

誰もが当たると思った

その時、矢はプリーステスに向けて放たれた

キュビィン！！

ズグシャァッ！！

放たれた矢は閃光となり、まるで髪をないかのように貫く

それはまさに希望、それはまさに天罰

そしてそれは一瞬でプリーステスに近づき

グシャァッ！

その頭部を撃ち貫いた

頭部を失ったプリーステスはその姿を黒い粒子に変え、消えた

「・・・スゲェ」

ポツリと順平は呟いた、だがそれ以上は言葉に出来ないようだった。しかし、それは残りの二人も同じこと。二人共だらしなく口を開けて呆然としている

その時

ドサッ！

星司が倒れる、それを見た公子達はすぐに駆けつけたが気絶しているだけというのが分かった瞬間安堵の息を吐いた

取り合えず公子達はボロボロの星司を治療したあと、電車を難なく止める。そのあと電車内にある星司の荷物を回収し、外にいた美鶴

と共に寮へ帰り、星司をある個室で寝かせた

最悪な日は、こうして終わりを告げた

ナンパ九戦目（後書き）

やっと終わりました、プリーステス編

最後の最後はフルボッコで終わる

もはや噛ませいぬですね

それではまた次回！

ナンパ十戦目（前書き）

今回は少し短いです

誰か、誰か俺に知恵を！

テストで欠点を取らない程度の知恵を、この俺にィィィイイ！！

それでは今回もキバって行くぜ！

ナンパ十戦目

「ん・・・うあ？」

朝の日射しで俺は目を覚ました、それこそ知らない天井の下で。取り合えず、ベッドから起きて近くにある時計を見る

現在の時刻――４時半

訂正、夕日で目を覚ました

ってか、俺今度はどんくらい寝てたんだ？一週間とかだったら洒落になんねぇぞ

と思っていると

ガチャ

突然入口のドアが開く

「起きたか」

そこにいたのは、白髪のイケメンだった

「ちょうどいい。起きたのなら着いて来てくれ。話したいことがある」

「ええーと、その前に・・・どちら様ですか？」

「ん？ああ、そういえば言ってなかったな。俺は「真田明彦」よろしく」

そう言って手を差し出す真田さん

「あ、俺は「稲垣星司」です。よろしくお願いします」

俺はその手をとる。所謂握手ってやつだ

「ああ・・・ところで稲垣、お前ボクシングに興味はないか？」

「へ？いや、ないですね」

「そうか・・・稲垣、俺と一緒にボクシングをしないか？」

「へ？ボクシング、ですか？」

俺が、ボクシング？

「ああ！このつきかた、そして力！まさに俺と（ボクシングを）やるのに相応しい体だ！」

「はぁ！？な、何言って・・・！？俺にそんな趣味はない！」

てか近ぇよ！こっちに顔積めよってくんな！

「なに、最初は苦痛だろうが、慣れれば中々いけるもんだ！どうだろう？なんなら今からでも（ゴシャァッ！！）アァーッ！！」

と熱弁をふるっている真田さん・・・真田の後頭部に岳羽流奥義、レンガ投げが炸裂する

「た、助かった・・・」

「大丈夫？星司？起きたばっかりで悪いけど、着いて来てくれる？」

「それはいいけど・・・コイツは？」

「放っておけばすぐに起きるわよ。ほら、行くよ」

・・・確かに、コイツは何故か順平と同じ感じがする

俺は気絶した真田を廊下に放置して、ゆかりと一緒に階段を上がった

作戦室

キングクリムゾン！説明の経緯は消し飛ぶ！

というわけで、俺は桐条先輩に説明してもらった。「影時間」のこと、「シャドウ」のこと、そして俺にも宿っているらしい力、「ペルソナ」についても

「というわけだ。そこで星司、頼みがある」

「・・・シャドウと一緒に戦うために〈S・E・E・S〉に入れ・・・ですか？」

「・・・ああ、頼む」

桐条先輩は申し訳なさそうに俺に言う。多分、一般人である俺を巻き込むのが申し訳ないのだろう、きっとそれほど別次元な戦いになるんだろう

「・・・断らさせてもらいます」

「ッ！そうか・・・」

そう言うと桐条先輩はひどく残念そうな顔をする。けど仕方がない、俺も命が惜しいんだ

あの頃の俺ならそう思っただろう、けど今は違う

「と言いたい所ですが」

「へ？」

だらしなく口をあけてポカーンとしてる桐条先輩、思わず吹き出しそうになる。が、それをこらえて俺は言った

「忘れたんですか？俺は美人とお姉さんの頼みは断らない主義なんです」

「ッ、ああ！これからよろしく頼む、星司」

「はい。よろしくお願いします、桐条先輩」

そう言って俺達は握手をした

俺はゆかりに近づいて手を差し伸べた

「ゆかりもよろしくな」

「・・・本当にいいの？」

「？何がだよ」

「・・・もしかしたら、死ぬかもしれないのよ？」

死ぬかもしれない、ねぇ

「それはゆかりも一緒だろ？それに、親友が命懸けで戦ってるのに、見過ごすなんて出来ない」

今度こそ、俺は大切な人を守りたいから

「ハァ、そこまで言われたらどうしようもないじゃん。・・・分かったよ、よろしく星司」

「ああ。よろしくな」

お互いに笑いあって、俺達は手を握りあった

この時、俺は知らなかった。この選択が、俺の人生を変える出来事になるなんて

ナンパ十戦目（後書き）

主人公、〈S・E・E・S〉に入る。の巻きでした！

え？ガッキー先輩の出番が少ないって？ガッキー先輩は犠牲となったのだ・・・順平とタルンダ先輩の、な

次回は主人公のペルソナが明らかに！？

それではまた次回！

ナンパ十一戦目（前書き）

今回はかなりグダグダです。ご注意を

そして皆様待望のあの方が登場！

それでは今回もキバって行くぜ！

ナンパ十一戦目

時間は飛んで夜。あ、まだ9時だからな

正式に〈S・E・E・S〉に入った俺は荷物を寮へ運ぶため自宅にいた

いや、正確には玄関で固まっていた。その理由は

「何・・・これ？」

拝啓、お父様、お母様

我が家に青い扉が出来ました

「って何でじゃァァァアアッ！！」

い、いや、落ち着け、落ち着くんだ俺！大丈夫だ、まだ焦るような時間じゃない

とりあえず、素数を感じるんだ・・・・・どうすりゃいいんだ？

ギギィ・・・・！

アァッ！？つまらない事を考えてる間になんか扉が某初代バイオゲームみたいな音をたてて開いていく！？

ヒュォォ・・・・！！

ん？あれ？なんか吸い込んでない？吸い込んでるよね！？絶対吸い込んでるよね！？

ギュォォォオオ！！

「ギャァァァアアッ！！吸引力の変わらない、ただ一つのォォォォオオ！！！！」

バタン！

そんな事を叫びながら、俺は青い扉に吸い込まれた

お――――、――き――――く――――！

何か声が聞こえる、女の声だ、しかもかなりの美人と見た！気を失っていた俺は俺に声をかけているまだ見ぬ美人と会うため、俺は目をこじ開けた

「あ、お目覚めになられましたか？」

・・・・・

「？どうなされました？」

「――――っなかった」

「？」

「やはり俺は間違ってなかったッ！！」

ガバッと俺は起き上がり目の前にいる美人さんを見る、全身を青いスーツのようなものを着ている。しかもミニスカ！！さらに銀髪の外国さん！！

「お付き合い前提に結婚してください！」

何か文法がおかしいような気がするが気にしない

「人の妹に手をだすんじゃないわよ！メ　ギ　ド　ラ　オ　ン　！」

「ギャァァァアアッ！！」

チュドォォォンッ！！

「落ち着かれましたかな？」

「そ、その前に、回復をお願いしたいんですけど・・・」

もう一人の金髪美人さんに謎のビーム攻撃を食らってボロボロの俺に明らかに鼻の長さがおかしいじいさんが俺に話しかける

「大丈夫でございますか？今治します」

―ペルソナチェンジ・ピクシー―

―ディアラマ―

銀髪美人さんが厚い図鑑のような物からカードを取り出すと、目の前に妖精のような小人が現れる。同時に暖かい光が俺を包む、すると俺の傷は無かったかのようにキレイサッパリ消えた

「おお！スゲェ！ありがとう美人さん！」

「いえ、元はといえば私の姉が原因ですので」

「いやいや、それでもありがとう！美人さん！」

と美人さんといい雰囲気になっていると

「もうよろしいですかな？」

チッ、空気読めよくそジジイ

「わーったよ。で？お前らは誰なんだ？」

速くしろ。俺は美人さんと話がしたいんだ

「これは失礼いたしました。私(わたくし)の名は「イゴール」。この空間、「ベルベットルーム」の管理者にございます」

「「エリザベス」と申します。今回、貴方様をお呼びした者です」

「エリザベスの弟、「テオドア」と申します」

「そして私が二人の姉の「マーガレット」よ」

フムフム、鼻の長さがおかしいじいさんがイゴール。美人さんがエリザベス、イケメンで美人さんの弟がテオドア、そしてさっき俺に極太ビームをカマしたのがマーガレットか

「俺は稲垣星司。それで二、三質問があるんだが、いいか？」

「構いませぬ」

「あんがと。それじゃあ一つ目、「ベルベットルーム」ってどこなんだ？」

「「ベルベットルーム」とは精神と物質の狭間にある場所のことにございます」

つまり、あやふやな場所にいるってことか

「じゃあ次だ、ここでの一分一秒は向こうでもカウントされてるのか？」

「「ベルベットルーム」は、世界から切り離された場所。ここに時間という概念は存在しません」

じゃあ、時間はたたないってことだよな？よかった、ここ出ていったら二年後とかだったらどうしようかと思ってたが、その心配もなくなったな

「最後だ。何故俺をここに連れてきた？」

「その質問については私が答えます」

そう言ってエリザベスさんは一歩前に出る。やっぱり真に美しい人はどんな仕草も美しいなぁ・・・

「今回貴方様をお呼びした理由。それは、私の姉、マーガレットが貴方に会いたいと申していたからです」

「ちょっ！？エリザベス！？」

へ？・・・どういうこと？俺、マーガレットとは初対面のはずだよな？そう思った俺は自然に視線をマーガレットへと向ける

「か、勘違いしないでほしいわね！わ、私は！別に！アンタとなんか・・・」

「そう言って、いつも愛しそうにため息をついてたのは誰でしょうね？（笑）」

「て、テオドア！？」

「素直になりましょう？お姉さま？（笑）」

「え、エリザベス！？」

「おやおやおやおや。これはこれは・・・そういうことだったのですか（笑）」

「あ、主まで！？」

「えーと、いまいち状況が飲み込めないんだけど・・・」

「う、うるさい！アンタは寝てなさい！」

―ペルソナチェンジ・スルト―

「ちょっ！？なんで戦闘体制！？と、とりあえず落ち着いて・・・！」

「うるさいうるさいうるさァァァいッ！！」

―メルトダウン―

ドォォォオオン！！

「ギャァァァアアッ！！？？」

り、理不尽だ・・・ガクッ

ナンパ十一戦目（後書き）

ベルベットルームの説明ってこれで合ってるのかな？

違ったら指摘をお願いします

マーガレットのキャラ崩壊？いつものことでしょう？（反省する気０）

次回こそ、次回こそ星司のペルソナを！

それではまた次回！

ナンパ十二戦目（前書き）

星司、ラブコメをする。の巻き

ちくしょォォォオオ！

死ねよ！リア充は皆死ねよ！

それでは今回もキバって行くぜ！

ナンパ十二戦目

「・・・ハッ！」

俺は目を覚ました、まず視界に入ったのは見覚えのある天井、ってことは・・・

「・・・戻ってきたのか」

起き上がって壁に掛けてある時計を見る、９時１５分。・・・確か入ったのは１０分だから

「・・・マジだったんだな」

どうやらイゴールは嘘を言ってなかったみたいだ。これは信じた方がいいかもな

「――――？あれ？何で俺気絶してたんだろう？」

何故か最後の方の記憶がない・・・まぁいいか、それより準備をしないとな

後ろを見ると、まるで扉は最初から存在していなかったかのように消えていた

「何だったんだ・・・？」

そう呟いて、俺は準備にとりかかった

「Ｎｏｗ　Ｉ　ｆａｃｅ　ｏｕｔ　Ｉ　ｈｏｌｄ　ｏｕｔ　～♪」

俺は荷物を肩にかけて歌を口ずさみながら陽気に歩いて寮を目指していた

ふと、腕時計を見る。時計の針は１０と９の間と５の数字を指していた

そんな時

「――、と――～い！」

何処からか楽しそうな声がする、それと一緒に犬の声も聞こえる。
誰かが犬と遊んでいるのだろうか？

よく聞いてみると、どうやら神社の方にいるみたいだ。俺は予定を変更して神社の階段を上り始めた

―神社―

「ゼェ・・・ゼェ・・・この階段、長すぎだろ・・・！」

もう15分ぐらい上ってるぞ・・・！と息切れを起こしながら上っていると、少し先にやっと終わりが見えてくる

俺は最後の力を振り絞り、最後の一段を上りきる

「ゼェ・・・ゼェ・・・や、やっと着いた・・・！」

もう二度と上りたくないな・・・「アハハ！よーし、もう一回だ！」
ん？

ああ、そういえば誰かかを確かめにきたんだっけ？

本来の目的を思い出した俺は膝に手をついてままの姿勢で確認するために顔を上げた

「よしよし、偉いぞコロちゃん」

「ワン！ワン！」

「うわっ！ちょっ！くすぐったいって！」

――――――――――――――――ハッ！

『あ、ありのまま今起きたことを説明するぜ！

”荒垣先輩がそれはもう可愛らしい笑顔で犬に舐められていた”

な、何を言ってるのか分からねぇと思うが、俺も何を言ってるのか分からねぇ！

二重人格とか猫かぶりとかそんなチャチなもんじゃねぇ！もっと恐

ろしいものの片鱗を味わったぜ・・・・！』

以上、俺の心の叫びでした

「アハハ！ん？」

「「あ」」

目と目が合う瞬間～♪

「・・・どうも」

「・・・・・いつから見てやがった」

「ええっと『偉いぞコロちゃん』ってところから・・・」

「～～～～～～～～っ！！！わ、忘れろォォォォオオ！」

ブォン！

「どわァァァア！！？」

何を思ったか知らないが荒垣先輩が殴りかかってくる。俺はそれを紙一重で避ける

「い、いきなり何するんですかって危なっ！？」

「忘れろ！忘れろ！忘れろ！忘れろォォォオオ！！！」

「うわっ！ちょっ！はなっ！しをっ！」

明らかに殺気の籠った拳の連撃。俺はそれを危なげに避ける

「はなっ！しをっ！（ブチッ！）話を、聞け！」

あまりにも話を聞かない荒垣先輩にキレて両腕を掴んで近くにあるジャングルジムに出来るだけ優しく押しつける

ガシャン！

「キャッ！」

ブッ！あ、危ねぇ・・・思わず鼻から愛情が噴き出すところだった。ってか思ったより顔が近くなってしまったが、まぁこの際気にしてらんねぇ

「～～～っ！（ボフンッ！）あう・・・あう・・・／／／／／／／」

何故か先輩の顔が真っ赤になってるが、この際気にしｔ（ｒｙ　さっさと言ってしまおう

「ハァ・・・いいですか？聞いてください先輩、俺はあなたのことを・・・」

「！！！！？？？」

「（ああ！？ま、まさかこれは、こ、ここここここ告白ぅ！？そ、そんな！？まだ心の準備が！）あう、あうあうあうあうあうあうあうあうあう／／／／／／／／／」

はうっ！（ドォン！）」

「え！？ちょ！なんで噴火したんだ！？先輩！？先輩ィィィイイ！！」

不思議なことに先輩は頭をまるで火山のように噴火させてゆっくりと倒れた。俺はそれを何とか受け止める

しかし、何で倒れたんだ？俺はただ『あなたのことを悪く言うつもりはありません』って言おうとしただけなのに・・・

「まぁとりあえず、目を覚ますまで一緒に」

ガブッ！！！！

「！！！？？ギャァァァアア！？」

突然何かに噛みつかれるような激痛が頭に走る。よく見ると先程先輩と遊んでいた白い犬が『俺の女に手を出すんじゃねぇ！』と言わんばかりに俺を睨みながら牙を突き立てている

「ちょっ！落ち着け犬！俺が悪かった！だから放せ！」

「ガウッ！」

ガブリ

ブシャァァァァ！！

「オギャァァァァ！？血が！？血がァァァァ！！？」

死ぬ！犬に噛まれて大量出血で死ぬゥゥゥウウ！！！

―学生寮―

「ただいま」

「あ、おかえり～ってどうしたの？その包帯？」

「はは・・・色々あったんだよ。な、先輩？」

「っ！（プイッ）」

あれ？先輩？何でそこで目を剃らすんですか？

「・・・アンタ先輩に何したわけ？」

「まて！俺は何もしてない！だからそのレンガを下ろせ！」

そんなに力を込められたら流石の俺でも死ねるぞ！

「ん？ああ帰ってきていたのか」

と桐条先輩が二階から下りてくる。た、助かった・・・

「チッ・・・」

そこ！舌打ちすんな！

「帰ってきてすぐで悪いが、荷物を持って作戦室に来てくれ。岳羽、案内を頼む」

「分かりました。ほら、行くよ」

「ああ」

俺はソファーから立ち上がり荷物を持って先々と進むゆかりについていった

―作戦室―

俺は今中々豪華な部屋のフカフカのソファーに座って皆を待っている。しかし、なんでこんなバカデカいテレビがあるんだろうな？まるで昭和のテレビに出てくる作戦室だな。ってここは作戦室だったか

ガチャ

「待たせたな」

と桐条先輩は他の皆を連れて入ってきた

公子にゆかり、順平と真田、そして桐条先輩と荒垣先輩

それぞれが適当にソファーに座る

「さて、話というのはこれからのことだが・・・その前に」

桐条先輩は持っていたアタッシュケースを俺の前に置き、開く

中には拳銃と「S・E・E・S」と書かれた腕章が入っている

「これは『召喚器』、読んで字の如く、ペルソナを召喚するためのものだ。そしてこれが〈S・E・E・S〉の証である腕章だ。ペルソナは『召喚器』がなくても呼べるが、使った方がスムーズに呼び出せる。さっそくだが使ってみてくれ」

と言われたので俺は拳銃の形をした召喚器に手を伸ばした

持ってみると不思議と恐怖心が湧かない。むしろ手に馴染むようだ

俺はこれの使い方を知らない、だが体が自然と動く。まるで魂に従ってるみたいだ。そして銃口を頭部に向け発した

「ペ、ル、ソ、ナ」

そして引き金を引く

ガゥン！

バキン！

するはずのない発砲音が聞こえたと同時にガラスが砕けるような音がする。そして俺の背後にはもう一人の自分が・・・

カランッ！

「ん？」

足元に何か落ちる、俺はそれをしゃがみこんで拾う

「これって・・・」

拾ったそれはいつも見覚えのある物だった。それは・・・

「矢ね」「矢だな」「矢だな」「矢だね」「矢だな」「矢だな」

「な、なんでじゃァァァアア！！？」

その日、学生寮には男の悲痛な叫びが響いたとか響いてないとか

ナンパ十二戦目（後書き）

はい、ついに主人公のペルソナが明らかになりましたね

あ、先に言っておきます

自分はｆａｔｅが大好きです

感想、ご質問お待ちしております

それではまた次回！

ナンパ十三戦目（前書き）

主人公、タルタロスに入るの巻き！

今回は主人公のペルソナの力が明らかに！？

果たして厨二病患者であるあしゅきが考えた能力とは！（泣）

それでは今回もキバって行くぜ！

ナンパ十三戦目

「ハァ・・・」

「だ、大丈夫だって！星司はペルソナを使わなくても強いから！」

フフフ・・・ペルソナの使えるお前が言ってもフォローにならないぜ、ゆかり。しかも矢って、矢ってお前、弓がないと意味ねぇじゃねぇか。もはやネタだよ、ネタ

パキン、と手に自分のペルソナの矢を出しさらに溜め息をつく。けど、他の皆と違って俺は召喚器がいらないからな。そこだけは、自慢してもいいだろう？

けど、こんなんじゃ戦えやしねぇ、足手まといになるだけだ

「ハァ・・・せめて剣だったらなぁ」

そう思った瞬間、手に握っていた矢が急に重くなる。慌てて見ると、それは矢ではなく、見覚えのある剣になっていた

突然だが、星司はゲーマーである。皆一度はやったことのあるゲー

ムから、他の人がしたことのない珍しいゲームまで。種類は豊富である、勿論、その中には『エロゲー』も入っている

話を戻そう。星司が握っていた剣は自分の大好きなゲームの剣、その名は

「約束されし（エクス）、勝利の剣（カリバー）？」

その声に答えるように剣が光る、星司はその澄んだ輝きに見とれていた

「・・・ハッ！き、桐条先輩に報告しないと！」

「・・・何？何で私空気なの？」

仕様です

「ふむ、なるほど。他にはどんな武器に変わるんだ？」

報告を聞いた桐条先輩は落ち着いた雰囲気でそう言った

そう言えば試してなかったな・・・俺は桐条先輩に一言言って実験を始めた

まずは、斧

・・・変化なし

次に、鎌

・・・これも変化なし

といった具合に試していき、結果的に変化出来るのは矢と剣、それと槍ということが分かった。早速桐条先輩に報告し、それを聞いた桐条先輩は皆の前でこう言った

「よし、これで星司にも戦ってもらうことが出来るな」

あ、やっぱり戦力に数えられてなかったんだ

「よし。今日はタルタロスに行くぞ。皆、準備を怠らないように」

そう言うと皆は大きく頷いた

・・・ところで、タルタロスって何？ソースの名前？

―11：58・月光学園前―

「・・・なぁ」

「何？」

「ここって学校だよな、タルタロスとは関係ないんじゃないか？」

学校の校門前、皆が武装している中、俺はゆかりに聞いた

「あ～・・・まぁ待ってれば分かるわよ」

言葉を濁しながらゆかりは準備にとりかかった・・・何か逆に恐くなってきたな

ふと、時計を見る、その時針は丁度０を指す

そして、世界は変わる

「・・・？」

何も起きない？別に何もないのか？と思っていると

ドドドドド・・・！！

突然、地震のような揺れに襲われる

そして、学校が轟音をたてて形を変えていく

「これがシャドウの巣、『タルタロス』よ」

ゆかりは忌々しそうに呟く。『タルタロス』その姿はとても歪で高さは月まで届くんじゃないかと思ってしまう

それにしても驚いた。まさかこんなに大きい物を見ることになるとは・・・何メートルぐらいあるんだろうな？

「星司君、どうしたの？皆行っちゃたよ？」

と気づけば目の前には公子がいて、向こうには皆が先々と進んでいた。なんとも薄情な奴らだ

「あ？ああ、悪い。それじゃ行くか？」

「うん！」

向こうの皆に追いつくため、俺と公子は小走りで『タルタロス』へ向かった

―タルタロス・１Ｆメインホール―

「これがタルタロスの中か・・・」

・・・意外と綺麗になんだな、シャドウが掃除でもしてるんだろうか？」

「いや、さすがにそれは違うと思うぞ」

と真田が言う。って

「なっ！？俺の考えが読まれた！？」

「口に出ていたぞ」

な、なんという初歩的なミスを・・・ｏｒｚ

「二人とも、遊んでないで速く来い。チーム分けをするぞ」

桐条先輩に怒られてしまった俺と真田は皆が集まっている所へ向かった

「それではチーム分けをする。明彦も復帰してより探索がしやすくなった、三人で一組になるように」

あ、そうそう。今まで真田は怪我かなんかで休んでいたらしいけど、ついさっき完治したらしい。チート過ぎだろ・・・

「じゃあ俺達はいつも通りか。うっし！やってやるぜー！」

「ええ～。私は星司君と一緒の方が「藤原」むぅ、分かりましたよ」

どうやらもう一組は決まってしまったらしい。じゃあ俺は

「真田と荒垣先輩か」

「おい待て！何で俺だけ呼びｓ「アキ、うるさい」ぐっ！分かった」

まとめるとこうなる

『チーム分け』

〈探索班、藤原公子・岳羽ゆかり・伊織順平〉

〈討伐班、稲垣星司・荒垣真人・真田明彦〉

あん？探索班と討伐班の違い？そうだな・・・簡単に言うと探索班はタルタロスを隈無く調べる班、討伐班は先々と進んでシャドウを倒していく班って感じだな

「よし。探索班は前回の続きの１１Ｆから始めてくれ、討伐班は柵のあった１６Ｆから始めてくれ。私はいつも通りにバックアップにまわる。皆、気をつけて行ってくれ」

「はい！（おう！）（了解！）（チッ・・・）」

「ああ、そうだ星司。お前の武器を渡しておく」

そう言うと桐条先輩は何処からともなく大きいアタッシュケースを取り出した・・・一体どうやって、いや、やめよう。何故か身の危険感じるからな・・・

「星司のためだけに作った、世界に一つしか存在しない武器だ」

そう言いながら桐条先輩はアタッシュケースを開ける、中には半分に折り畳まれたリカーブボウが入っていた

しかし、標準器などは外され無駄のない形になっているあるのは弦と弓だけだ。さらに大きさは広げれば身の丈ほどになりそうなほどに大きい

とりあえず、俺は弓に手を伸ばし持ってみる

「っと、意外と軽いな」

「・・・一応、１０キロはあるのだがな」

マジで!?うわ～、俺っていつのまにこんなに化け物になってたわけ?なんかヘコむ・・・

こころなしか、他の皆の目が生暖かい気がする・・・ちくせうｏｒｚ

気をとり直して

「うっし！やってやるぜー！」

「気合い入れるのはいいけど、空回りしないでよね」

「星司くーん！行ってきまーす！」

探索班は長い階段上り、扉の中へ消えていった

さてと

「それじゃあ俺達も行くか。とりあえず、死なない程度に進もう、んでもって邪魔する奴は倒す」

「チッ・・・」「フッ、そうこなくっちゃな」

俺達も探索班の後に続き、扉の中に消えた

―タルタロス『世俗の庭、テベル』・１６Ｆ―

「ん？柵が無くなってるな」

ついた時、真田は言った

「柵があったのか？」

「ああ、前はあったんだがな・・・まぁ進めるようになったのだからいいとするか、行くぞ」

そう言って、真田は階段に向かう。こころなしかその姿はワクワクしている子供に見えた

その時、俺の頭に何かが走る。反射的に上を見る、天井には巨大な蜘蛛のような何かがへばりついて真田を狙っていた

「っ！真田！上だ！」

「何！？」

俺の声に焦ったのか、慌てたように天井から真田へ落ちてくる。しかし、真田はそれを転がりながら避ける

ドォン！

「チッ！アキ！無事か！？」

「ああ！こっちは問題ない！」

落ちてきた何かの姿を見る。四つ足のカエルのようなものに人の上半身生えている、色は全体的に迷彩色、首には赤いマフラー

「！？シャドウか！」

その言葉に俺は双剣『干将・莫耶』を真田は拳を、荒垣先輩は斧を構える

『■■■■■――――！！！』

声にならない叫びを上げ、シャドウは俺達に襲いかかった

ナンパ十三戦目（後書き）

次回、主人公、謎のシャドウと戦うの巻き

謎のシャドウの正体は皆様もう分かりましたよね？

それではまた次回！

五万ＰＶ越え記念！質問コーナー！！

〈五万ＰＶ越え記念！質問コーナー！！〉

～～♪（ＢＧＭ、［ジュネスのテーマ］）

〈はい皆様、おはようございますこんにちこんばんは！エブリディヤングライフ、してますか？作者のあしゅきです！〉

「どうもどうも。主人公の稲垣星司です！」

〈イヤー、まさか五万越えするとは。思いもよらなかったな星司〉

「全くだ。これも全ては見てくださる読者の方々のおかげだな」

〈皆様、本当にありがとうございます！〉

「さてと、今回は前回と同じく質問コーナーだ。皆様がおそらく気になっていること、実際にあった質問を答えていくぞ」

〈それでは第一問！〉

『叶ティーチャーは何処へ！？』

〈心配ご無用！ちゃんと出します！〉

「・・・友近、生きろよ」

第二問

『あれ？風花は？』

〈風花？・・・ああ、いましたね、そんなの〉

「お前な・・・一応メインヒロインなんだから覚えとけよ」

〈だって次の風花の出番、一ヶ月ぐらい先だし〉

「風花ェ・・・」

第三問

『何日とか書いてないけど、本編は何日ぐらい？』

〈え～と、プリーステス戦の翌日だから・・・５月１０日ですね〉

「ん？けど原作じゃあ真田って２３日に復帰じゃなかったけ？」

〈平行世界だからモーマンタイだ〉

第４問

『星司のペルソナって形だけじゃなくて本数も変えれるの？』

〈え～と、残念ながら答えてしまうとネタバレに繋がるので答えられません。それは後のお楽しみってことで〉

「・・・とか言いながら友達にはしてたよな？」

〈いいんだよ、どうせアイツ見ないし〉

〈こんぐらいですかね〉

「質問はいつでも受け付けてるぞ。ここが気になるとか、あれ？これおかしくね？等々」

〈そこでですが、番外編を書こうと思います。一応二つほど案は考えています〉

『友近外伝』

『こりずに次回作予告』

〈この二つですかね。あ、別にこれはアンケートじゃないですよ。ただこういうのがあるってことを知ってほしかっただけです〉

「・・・どうせ二つとも書くんだろ？結局」

〈サランラップ！それでは皆様、たくさんのご来訪ありがとうございます！〉

「これからも『シャドウ弓』をよろしく頼む！」

〈え？なにその名前〉

「略したらこうなった」

「〈それではまた次回！〉」

ナンパ十四戦目（前書き）

ついに星司達と巨大シャドウがぶつかる！

前編後編に別けて続けていこうと思います

探索班はオマケだと思ってください

あと『ＰＥＲＳＯＮＡ３　Ｒｅ：Ｃａｌｌ』を書いてることで有名な清良　要様にアドバイスをもらって今回から書き方が変わります

時間もあれば今までの話も修正していこうと思います

それでは今回もキバって行くぜ！

ナンパ十四戦目

討伐班がシャドウと出会ったころ、探索班もまた雑魚ではあるがシャドウと戦っていた

―タルタロス『世俗の庭・テベル』―

「オモイカネ！」

ガゥン！

バキン！

―ジオ―

ドォン！

公子のペルソナ、『法王・オモイカネ』の電撃をくらったシャドウはその身を黒い粒子に変え、消える

「ふぅ…二度と出てこないでね」

〈テキ、ショウメツカクニン。ショウリ、ショウリ〉

公子は髪をかきあげながら、オモイカネはその場で回りながらそう言う

「ヘルメス！」

バキン！

―スラッシュ―

ザシュ！

順平のペルソナ『ヘルメス』の斬撃を受けたシャドウは先程と同じく粒子になり消えた

「しゃあ！　見たか！　俺の大活躍！」

〈あまり調子に乗るな。汝などまだまだ〉

順平は元気よくはしゃぎ、ヘルメスはそれをやれやれといった感じで注意する

「イオ！」

バキン！

―ガル―

ドォン！

ゆかりもペルソナ『イオ』を呼び出し、二人に負けず劣らずシャドウを倒す

「ハァ…なんとかなったね」

〈それでも私達は勝ったんだから、いいじゃない〉

ゆかりは心底うんざりそうにそう言うと、イオはもっと誇れと言わんばかりにゆかりの周りを翔ぶ

『お疲れ様、よくやったな。君たちはまだまだ強くなれそうだな』

その戦闘を見ていた美鶴は感心しながらそう言う

それぞれシャドウを倒した三人は集まり、話し合う

「思ったより楽勝だったな！　うっし！　次行こうぜ！」

〈調子に乗るなと言ったはずだ汝。勝って兜をなんちゃやら、油断はするな〉

「ヘルメスの言うとおりよこのゲス野郎、そんなんじゃコロッと死ぬわよ」

説教ａｎｄ毒舌をくらった順平はその場でｏｒｚのポーズをとる

「…辛口だね、二人とも」

〈それがあの子達のいいところだと思うわよ〉

〈ナカヨシ、ナカヨシ〉

ゆかり達はその光景を眺めながら言う

「勘弁してよねオモイカネ、こんな奴らと仲がいいわけないじゃないっと、追加オーダーみたいよ」

そう言うと奥から三体のシャドウが現れる、それを見た公子はうっとしそうにする

「ハァ…これだけ働くんだったら。給料の一つも貰わないと割に合わないわね」

〈それだけ軽口が叩けるうちはいらないでしょ〉

『敵三体、それほど強くはないが気をつけろ』

「うぃ」「はい」「ハァ…」

藤原のあまりのやる気のなさをみかねた美鶴は物で釣る作戦に出た

『…藤原、この探索が終わったあと、許嫁の写真をやろう』

瞬間、公子の目付きが変わる

「いらっしゃいませェェェエエ！！」

〈ラァシャーセ！　ラァシャーセ！〉

…いまいち緊張感に欠ける探索班だった

一方、討伐班は

「来るぞ！」

その言葉を皮切りに戦闘が始まる。先手必勝、シャドウは腕を振り上げて飛びかかってくる

「散れ！」

指示通りに三人はそれぞれ別の方向に走り出す

バァン！

とシャドウの平手が地面に叩きつけられた音が響いた

「しゃあ！　行くぞ！」

星司は大きな隙を見逃さず、双剣『干将・莫耶』を振るい、シャドウの蛙のような顔を斬る

ザン！

〈■■■■――！！〉

とシャドウの顔には×の字の傷がつく。シャドウのあまりの痛みに悶える

「行くぞ！　ポリデュークス！」

バキン！

その隙に真田はペルソナ『ポリデュークス』を呼び出し、更に一撃

〈くらいナサーい！〉

―ソニックパンチ―

ガァン！

その一撃をくらったシャドウは少しよろけるが痛みに慣れたのか真田に狙いを定め、手を降り下ろす

「っ！？」

近づく巨大な掌、しかしそれを荒垣は許さなかった

「カストール！」

バキン！

〈ヒーハー！　行くぜェ！〉

―デッドエンド―

ガァン！

荒垣はペルソナ『カストール』を呼び出し、スキル『デッドエンド』でシャドウの掌を一時的に止める

しかし、真田にはその一瞬だけで充分だった。真田はその場をすぐに離れ、シャドウの一撃を避ける

「すまない！　助かった！」

〈アりガとでーす〉

「チッ、油断すんじゃねーよ」

〈足手まといは引っ込んでろォ！〉

真田は荒垣に礼を言うが、荒垣はそれほど気にせず言葉の裏に次からは気をつけろという意味をもたせる

長年過ごしてきた二人だからこそ出来ることだ

「お二人方、そこにいちゃ当たっちまうぜ！」

二人は振り向く、そこには背丈程もあるリカーブボウを構えている星司がいた

「行くぜ、ペルソナ」

星司は手の中に『カラドボルグ』を持ち、矢としてつがえようとするが

「えぇーと、確か捻れさせればいいんだよな？　けど俺魔術なんて使えないし…あーもう、ペルソナ！」

散々悩んだ結果やけくそで叫ぶと、光を放ちながら『カラドボルグ』は捻れていき『偽・螺旋剣〈カラドボルグ〉』となる

「なんかよくわかんねぇけど、これでいいんだろ！」

星司は『偽・螺旋剣』を矢としてつがえ、弦を引く。そして狙いを定め、弦が限界に達した時、ゆっくりと引いていた指を放す

轟ッ！　と『偽・螺旋剣』は空気を切り裂き、捩れ錐のように逆巻きながら翔ぶ

そしてそれは高速でシャドウに向かい

グシャア！

直撃する。『偽・螺旋剣』の当たった足はちぎれながら彼方へと吹っ飛ぶ

〈■■■■■■■――――！！！！〉

足が一本ちぎれたシャドウはバランスを崩し、地面に倒れる

―Ｄｏｗｎ！―

まったくの無防備な状態になったシャドウ

その時、三人の目が光る

「この時を待っていた！　仕掛ける！」

「チッ、遅れんじゃねぇぞ！」

「よし来た！　フルボッコの時間だぜ！」

「「「歯を食いしばれェェェェェ！！」」」

ドカッ！　バキッ！　ボコッ！

ドコォン！

〈■■■■■――――！！〉

リンチにされたシャドウはちぎれた足を再生し飛び上がり、一旦星司達と距離を取る

睨み会う両者、そして同時に地面を蹴った

〈おまけ〉

シャドウと激戦を繰り広げている間、探索班はと言うと

「……迷った」

「迷ったわね」

「何冷静に言ってんのよ！　ってかそもそもは順平が『こっちに何かある気がする！』とかなんとか言ったせいでしょ！」

〈ハァ…我ながら恥ずかしい〉

〈あらあらあらあら〉

〈マイゴノマイゴノナンジタチ〜♪〉

「アンタ達もなんかしなさいよォォォオオ！！」

常識人、岳羽ゆかり。彼女の受難はまだまだ続く

ナンパ十四戦目（後書き）

どうでしょうか？読みやすくなったでしょうか？

感想をお願いします

それではここでペルソナ達の性格を書いていこうと思います

『ヘルメス』…委員長タイプ、キッチリカッチリ勝つまで油断はしない慎重な性格。しかし皆には頑固と言われる

『イオ』…ミステリアスなタイプ、母親のようなしゃべり方が特徴。口癖は「あらあら」

『オモイカネ』…天然タイプ、ロボットのような片言なしゃべり方が特徴。因みに女の子

『ポリデュークス』…外国人タイプ、まだまだ下手くそな日本語を喋る。性格はなんとかなるの楽観主義者。因みにカタカナになるのはあ行

『カストール』…不良？タイプ、乱暴なしゃべり方がデフォルト。性格は快感と快楽を求める快楽主義者、以外とツンデレ

こんな感じです

それではまた次回！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6417w/

PERSONA3―俺とシャドウと時々ナンパ、あと弓兵―

2011年11月17日19時58分発行